

---

# ヒカリ

トモリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒカリ

### 【Nコード】

N86920

### 【作者名】

トモリ

### 【あらすじ】

「くだらない」それが葵<sup>アオイ</sup>がこの世界に対して思うこと。

そして不思議な青年との出会いにより、物語は大きく動き出す。

## 1 不思議な青年

光にいる少女は思いました。

この世界は眩しすぎる。私にこんな光、必要ない。

闇にいる少年は思いました。

光に行ければきっと心から笑うことができるのに。

そして二人は思います。

『この世界から逃げ出すことができればどんなにいいことだろう』

\*\*\*\*\*

蒼すぎる空を仰ぎ、彼女は思う。

私に光なんて必要ない。

光があってもありのままの自分が映し出されて嫌になるだけ。  
そして自分の影が濃くなるだけ。

誰か私を……

私をこのまぶしすぎる世界から連れ出して。

朝。  
アオイ

葵は家の玄関を出るとため息をついた。今日も憂鬱な一日が始まったのだ。

最近思うこと・・・それはこの世界のくだらなさ。

毎朝同じ時間の電車に乗り、同じ時間へ学校へ行く。そして皆と同じ制服に身を包み、同じ勉強をする。

(・・・くだらない)

「・・・はー」

毎朝の同じ光景を目にしながら、葵は学校の門をくぐった。

葵の通っている高校は、そこら辺では名のしれている、男女共学の県立高校だ。共学といっても男子とほとんど口をきかない葵にとっては男子はただウザいだけの生き物にすぎない。

そして葵は汚れた上履きに履き替えると、重い足取りで2階へある自分の教室へ向かった。

授業中。

「久保田さん!!」

「・・・はい」

葵は英語の先生に呼ばれ、のろのろと自分の席から腰を上げる。

「ぼつ」としてないでこのbe動詞を適切な形に直してみなさい」

「・・・分かります」

「こんな問題をも解けないようじゃ、進学できませんよ!!では、その後ろの人!代わりに答えなさい」

葵は先生の言葉を聞き流すと、力なく再び自分の席へ腰を下ろした。

（はー・・・）

葵はいつも思う。こんな勉強をして将来いつたいどんなことに役に立つのだろうか。きつとこんなこと、意味のないことだ。

（くだらない）

休み時間。

「ねーねー！！昨日のテレビ見た！？　くん、チヨーかつこよくない？」

「見た見た！チヨーかつこ良かったよね！」

そんな会話が葵の耳に入る。葵はいじくっていた携帯電話に視線を戻すため息をついた。

なんでそんなに懂れる必要があるのだろう。一方的な感情だけで相手はこちらのことを見ているわけでもないのに。

（くだらない）

「葵ちゃん！！」

よく一緒に帰る友達、透子<sup>トウコ</sup>に声を掛けられた。

「一緒に帰ろー！」

透子は、葵とは正反対のとても明るく前向きな性格で、そんな透子はいつも葵のことを気にかけてくれる。

「うん」

葵はいつものように答えた。

しかし葵は、こんな優しい友達がいても、心の奥底までは明るい

気持ちにはなれなかった。透子ともきつと高校までの付き合いになるだろう。これも一時的な友情にすぎないのだ。

（くすつ。みーつけた）

その、どこからか聞こえてくるような微かな声に、葵は気づくはずもなかった。

「ただいま」

「お帰り！あおちゃん！！」

葵が自宅の玄関の扉を開けると、すぐに葵の姉、清音キヨネが迎えてくれた。

清音は葵より2つ年上で家から車で30分ほどの大学に通っている。今日は、早めに終わったらしく、家に1人でいたらしい。

「家に誰もいなくて寂しかったんだよー。あおちゃんが帰って来てよかったあ」

「・・・あつそ」

葵はそっけなく答えると、スタスタと2階へある自分の部屋へ向かった。

「・・・あおちゃんの大好物のシュークリーム買って来たんだけどなあ」

その言葉を聞くと、ピタッと葵の足が止まった。

「ねっ！？一緒に食べよ！？」

葵は少し戸惑ってから、「うん」と答えた。

「・・で。最近どう？」

清音は、口にシュークリームを頬張りながらそう尋ねる。

「別になにもないよ」

葵も口に着いたクリームをなめとりながらそれに答えた。

「・・・・・なんか最近元気ないから、何かあったのかなあって思ったんだけどなあ」

「だから何もないって！」

「・・・・・ふーん。恋の悩みでもあるのかなあって思っちゃった！！」

「・・・・・」

「・・・・・あおちゃんは何でも内にためこんじゃう癖があるんだから、何かあったらお姉ちゃんに言つのよ！！」

清音は優しい瞳で葵を見つめる。

「・・・・・分かったあ？」

「・・・・・分かった、分かった・・・・・ありがと」

最後に言った言葉は聞こえたかどうかは分からないが、葵はスツと立ち上がると、「ごちそうさま」と言って自分の部屋へ向かった。少しうるさいけど、葵はそんな姉が好きだった。

その日の夜。

葵はろくに勉強もしないで、ベットにもぐりこんだ。瞳を閉じるとそこには、真っ暗な闇の世界が広がっていた。

葵はこの闇が嫌いではなかった。

くだらない事ばかりの世界より、何もない世界の方がいい。そう思う時もよくあった。

（いつそ、こんなくだらない世界なら・・・）

「消えてしまえばいいのに！！でしょ？」

突然頭の上の方から、おもしろがっているような青年の声が聞こえてきた。

「！！！！」

葵は心臓の飛び出る思いでベットから体を起こすと、自分の頭の上を見上げる。

それと同時に視界に飛び込んできたのは、空中で胡坐をかき、葵を見下ろす青年の姿だ。

「こんにちは！！」

青年はニヤニヤしながら言った。

しかし葵は、すぐにまたベットに潜り込む。

（・・・これは夢に違いない。だって知らない人間がこの部屋にいるわけないし、むしろ空中に浮かべるはずがない）

葵は今の状況が理解できるはずもなく、頭の中を必死に整理しようとする。

「くすっ」

笑い声とともに、ストツと床に足をつける音が聞こえた。その途端、いきなりふとんを引き払われる。

「！！！！！！！！」

葵はあまりに突然の事に、そのままの姿勢で固まる。

「くすすすっ・・・今までで、君の反応が一番最高だよ！！くっくく・・・」

視線を動かすと、そこには、笑いをこらえている青年の姿があった。

乱して着ている、白いYシャツの下には、これまたまっ白いズボンを履いている。髪は、外国人のような茶の色に、少しウェーブがかかっていた。



「へー。こいつが、100人目の子供かあ！」

今度は、目の前に、親指より少し大きい位の、小さな男の子が現れた。

「わっ!!」

葵は飛び上がり、後ずさりすると、そのまま後ろの壁に背中をぶつけてしまう。

「くっく・・・ぷぷっ・・・」

今度はさっきの青年が、笑いをこらえきれなくなったように笑いだした。

「おい!! ライト!! おまえ、笑いのつば浅すぎだぞ!!」

「ぷぷ・・・はーごめんごめん。ギイン。」

目の下に浮かんだ涙を指で拭いながら、真っ白な青年 ライトはそう言った。

「・・・あんなたち、何者？」

葵は掌が汗ばむのを感じながら、そう、問いかける。

「ふふっ。ひ・み・っ」

ライトが、人差し指を唇に合せて、奇妙な笑みを浮かべて言う。

すると、小さな男の子 ギインは顔を歪めた。

「うわ。きも!!」

「じゃーまたね! 葵」

ライトはギインの言葉を聞くつもりはないらしく、そう言い残すと、その場からスッと姿をかき消した。

「おい!! 待てよ!!」

その後につづいてギインも、同じように消えた。

「・・・」

葵はただ茫然と、二人が消えた空間を見つめることしかできなかった。

カーテンの隙間から、朝日が射し込んできた。どうやらもう朝が来たらしい。

葵はベッドから起き上がる。それと同時に昨晚のことが脳裏によみがえった。

（・・・やっぱり夢だったのかもしれない）

葵はベッドから起き上がると、いつものように顔を洗い、髪をとかすために洗面台へと向かう。

寝ぐせのついた髪をとかしていると、葵はある違和感を感じた。

（なんかいつもと違うよーな・・・）

ふと髪を掻き上げると、葵は驚きのあまり息をのんだ。

（なにこれ！？・・・耳が・・・！？）

そこには、いつもと違う形の耳があった。いつもは当たり前のように先が丸くなっているはずの耳。その先端が尖っている。まるでゲームやアニメの中の登場人物のように。

葵は、自分の目を疑った。

（これ・・・本当に自分の耳？）

「あおちゃん、おはよう！！」

そこに突然、清音が入って来た。

「！！！！」

葵は驚きと混乱のために、その場で固まる。

「？ あおちゃん、どうしたの？？そんな驚いた顔して？」

清音は、何事もなかったかのように、葵に話しかけた。

「べっ・・・べつに・・・」

「・・・ふーん。まっいいけどね。それよりも朝ごはん食べないと、お母さんが片付け始められないから早くしてね？」

「うっうん・・・」

清音がその場から立ち去ると、葵は安堵の息をもらした。

（よかった・・・お姉ちゃん気づかなかったみたい・・・それにしても、何で急に耳がこんな形になってるんだろう・・・）

そして葵は、もう一度髪を掻き上げて、自分の耳を確認した。

それは、やはり先が尖っている。

（やっぱり見違いじゃない）

ふとその時、昨晚の青年のいたずらっぽい笑みが、脳裏に浮かんだ。

（・・・もしかしてアイツと関係があるんじゃない・・・？）

「あおちゃん！！はやく」

清音の、元気な声が聞こえてきたので、葵はひとまず耳を髪で隠すと、朝食へ向かった。

（そういえば、私の事100人目の子供って言ってたけど、どういう意味？っていうか、何の100人目・・・？）

葵はやはり昨晚の事が気になってしょうがなく、通学の途中、毎日満員電車の中で、そんなことをぼーと考える。

「葵ちゃん！！」

突然かけられた声の方向へ振り向くと、そこに元気に手を振っている透子の姿があった。

「おはよー！！」

「おはよう」

葵は、少しドキマキしながら答えた。透子や他の人に、自分の耳が見られたら大変だ。

「透子、今日は部活の練習はないの？」

葵はそう尋ねる。透子は合唱部に入っていて、毎日朝練があるので、葵と同じ電車に乗るのは珍しい。

「葵ちゃん何言っているの？今日からテスト1週間前でしょ？」

透子は、朝練をやらなくてすんでうれしいのか、少し弾んだ声で言った。

「あっ・・・そうだね！」

（そうだ。もう少しでテストだ）

しかし葵にとっては、勉強する気には全然なれなかった。

テストでいい点数をとれたとしても、将来いたいどんな役に立つというのだろう。葵にとっては、意味のない事に思えて仕様がなかった。

（くだらない）

その時、葵にいつもと違った感情が生まれた。しかし、それに違和感はない。むしろ、それに解放感を覚えた。

「葵ちゃんどうしたの！？怖い顔をしてるよ！？」

「えっ！？そう？」

葵はとっさに答えると、そこに「大丈夫。いつもと同じだよ」と付け加えた。

（こんな意味の無い事をしているんなら、今日学校をさぼってしまおう）

それは、初めての気持ちだった。

葵は、学校から離れた公園にいた。平日のせいか、そこには葵しかいないようだ。そして、近くにあったブランコに腰をかけると、ため息をつく。

（学校、さぼっちゃった・・・）

透子には、具合が悪いので家に帰ると言っておいた。学校側に、ばれることはないだろう。

（あーでも、さぼったはさぼったで暇だなあ）

まあ、学校でくだらない授業を受けるよりはましだが。

「くすす。学校さぼっちゃた〜！」

「！！！」

葵がびつくりして振り返ると、そこには昨晩会った青年、ライトがいた。

ライトは、うれしそうな顔で言った。

「こんばんは！」

葵は何で朝なのに、こんばんはと言ったろうと不思議に思ったが、そこにはあえてつつこまないで、一番言いたかった事を最初に口にする。

「ねエ。この耳、あなたのせいでしょう？」

「……ふふ。そっちの方が、かわいいじゃない？葵」

「……は……」

かわいいと言われ、葵の口からは、気の抜けた返事しか出てこない。不思議と悪い感じはしなかった。

「お〜！！ずいぶん変化したなあ！！！」

「！！！」

急に目の前に、またギインという小さな少年が現れた。良く見ると口にドラキュラのような、小さな2本の牙が生えている。

「へ〜やつと魔界の住人ら……フゴー！！」

ギインの口を、急にライトが押さえつけた。

「ふふ。僕達ちよつと急に用事を思いだしたから、今日の所はかえるよ」

「フゴゴー！！」

ライトは、ギインの口もとを押さえつけながら、爽やかな笑みを浮べて言った。

「えっ！！ちよつと！！！」

葵が言い終える前に、2人はスツと葵の視界から姿を消した。

（魔界の何って言った人だろう……？良く分からなかった……）  
そして、ふと耳に手をのばすと、葵はまた驚きのあまり息を飲ん

だ。

耳は髪から出るほど細長く尖っていて、髪で隠せる程の大きさではなくなっていたのだ。

葵はあせった。急に、こんな変な耳になってしまって、これからどうしていいのだろうか。

（絶対、あの2人が怪しい・・・どうにかして元に戻してもらわないと・・・）

「見て見て!!」

急に、少し遠くの方から、子供の声が聞こえてきた。

（見られた!?)

葵は、反射的に耳を手で覆う。しかし、無残にも手から耳が突き出てしまっていた。

そこには、子供とその母親らしい人の姿があった。

「ねえねえ。ママ。なんであのお姉ちゃん、あんな所にいるの?」

子供が葵のことを指さしながら言った。

「あら。なんででしょうね」

母親が少し困ったような笑みを浮かべながらそれに答える。

そして2人の親子連れは、何事もなかったように歩き去っていった。

（・・・?たしかに見られたはずなのに・・・?）

葵には安心感と、それに対しての不思議に思う気持ちも沸き起こってきた。

（・・・もしかしたら・・・）

この耳は、普通の人には見えないのかもしれない。見えていたら、さっきの子供は、なんで耳が尖っているの?と聞いただろう。

「ただいま」

葵は、いつもの帰宅時間に合せて、家の玄関のドアを押しあけた。しかし家には誰も帰って来ておらず、葵の声だけが空しく家の中に響いた。

（今日は、お姉ちゃんも帰って来てないんだ）

葵の両親は、二人とも働いているので帰ってくる時間も遅い。

だから、姉が帰って来ていない時は、葵は一人でいることになっ  
てしまうのだ。

（・・・まあ慣れてるけどね・・・）

葵は鞆を放り投げると、洗面所へ向かった。そして鏡で自分の姿を映してみた。そこには、朝、鏡で見た自分とは違う、まるで妖怪のような自分の姿がある。

「・・・変な姿・・・」

葵はポツリと呟くと、バタバタと二階上がり自分の部屋のベッ  
トにドサツと倒れこんだ。

（いつも暗い考えをしている自分は、こんな姿が似合っているのか  
もしれない・・・）

「あおちゃん！」

「・・・！！」

目を開けるとそこには、心配そうな顔で覗き込んでいる、清音の  
姿があった。どうやらいつのまにか寝入ってしまったらしい。

「どうしたの？制服のままで寝ちゃうなんて、具合でも悪かった？」

「・・・ううん。べつに」

「そっかぁー。それなら早く着替えて下へ降りてきて！！もう夕飯  
できるって！」

「・・・うん」

そして清音は、バタバタと下へ降りていった。

葵は、手を耳へ伸ばした。やっぱりそこには、葵の耳でない耳があった。姉も何も言ってこなかったので、やっぱりこれは普通の人には見えないらしい。

（やっぱり、この耳は私と、あの二人にしか見えないんだ・・・）  
そして葵は、制服を脱ぎ捨ていつもの楽な服に着替えると、重い足取りで下へ降りていった。

\*\*\*\*\*

「ふふっ。もうあの子葵は手に入れたと同然だね！」

ライトは口元にニンマリと笑みを浮かべる。

「うつしゃー！！これでやっと100人そろっ！長かったあー」

ギインがくるっと一回転しながら、嬉しそうに答えた。

「ふふ。そうだね」

ライトは答えると、自分達の周りを見渡した。

ここは、光の無い世界“魔界”。

ライトは、“一人目”なってから光を知らずに生きてきた。

闇に心を捕らわれし者は、光の中で生きる事を許されない。夢や希望で溢れる地上では、生きられないのだ。

だからこそライトは、再び光が欲しかった。

そして再び地上で暮らしたかった。普通の人間として。

（だからこそ僕には、葵が必要なんだ）

そう。闇に心を捕らわれし者が。



\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

## 2 闇を消す者

また朝が来た。朝は待たなくてもやって来る。そして同じ毎日を送ってくる。毎日その繰り返し。

「はー・・・」

葵はため息をつく、ベッドから体を起こした。

（今日も学校をさぼってしまおうか）

そんな考えが頭をよぎった。

（でも、さっぼても暇だし・・・）

・・・しょうが無い・・・行くか。

葵は、チャイムが鳴ると同時に席についた。

一時間目は国語だ。葵は、国語が嫌いだった。（国語もかも、しれないが）

特に、国語の先生が嫌いだった。正直いつてウザかった。

退屈な授業中、葵はすることもなく窓の外を見ていると、突然、

「久保田！！もっと集中しろ！！」

先生の怒鳴り声が入ってくる。

耳が変化したせいか、いつもよりうるさく聞こえるような気がした。

そして葵は、ゆっくりとその場に立ち上がる。クラスの視線が一斉に葵に向けられるのが分かった。

「・・・あんだ、ウザイよ」

それと同時にその場の空気が凍りつく。

それでも葵は気にも留めなかった。本当の事を言っただけだ。怒りに顔を真っ赤に染める先生に葵は冷たい視線を向ける。

すると突然、誰かに腕を掴まれた。

「ちよつと来い！」

「!？」

葵は引きずられるようにして腕を引つ張られながら、教室を出た。

そして、葵はそのまま屋上へ連れてこられた。

「つ……!! 放して!!」

葵は無理やり相手の手をひきはがした。

「……………」

相手はただ葵の目をじっと見据えると、落ち着いた口調で、「立派な発言で」と、だけ言った。

「……………あんた誰？」

葵は、むっとして相手を睨みつける。

「俺は、ササヤマシゲキ笹山繁樹。ちなみにあんたと同じクラスの2年B組で、出席番号15番のB型17歳」

繁樹は、スラスラ読むようにいうと、再び見透かすような視線を葵に向ける。その顔には、笑みのひとつも浮かんでいない。

「……………つか、クラスの奴の名前と顔くらい覚えておけよ」

「……………」

葵は何も言わずに、パツと目を反らす。

（なんか、こういう人苦手……）

だから男子は嫌なのだ。このなれなれしさが、葵は嫌だった。「ところでその耳なに!？」

「！！！」

葵はその言葉に、息を飲んだ。

（この人には見えている・・・？）

葵は直感的にやばいと感じ、その場から走り去ろうとした。

しかし、後ろから急に肩を強く掴まれた。

「-っ！！」

「逃げんなよ」

すごい力だ。葵の力では、到底かないそうにない。

すると今度は、首に腕を回されてぐつと引き寄せられた。

「-っ！！放して！！」

「・・・久保田には悪いけど、これが俺たちの仕事なんで。“カリ

ウド”としてのね」

「-・・・！？」

葵は意味が分からなかった。でも、今自分が、危険な状態にあるのは確かだ。

「もう闇の存在になりつつあるお前には、消えてもらう必要があるんだよ」

葵のすぐ背後から、氷のように冷たい声がそう言う。

葵は意味が分からず、何も言うことができなかった。今、葵にあるものといえば、絶望と恐怖だけだ。

と、その時葵の中に“何か”が生まれた。そしてそれは葵の恐怖心をすべて消し去った。

（何で私は、こんなことで怖がっているのだろう）

すると葵は、繁樹の腹に力強く肘打ちをいれた。

「-っ！！！？」

そして、休む間もなく拳をにぎり、繁樹の顔面めがけてそれを振る。

しかし繁樹は、すばやく手のひらで葵の拳を受け止めた。

「・・・そんな攻撃、俺に当たるとでも思ってたの？」

すると繁樹は、体勢を低くし、右足で葵の足をすくった。

葵はその場でに倒れこむ。

そして、繁樹は葵の体の上に、なんのためらいもなく、ドカツと腰を下ろした。

（っ・・・これじゃ、体が動かせない・・・）

倒れた時に打ったのか、頭がガンガン痛んだ。

「俺に抵抗しても無駄なんだよ。おとなしくしろよ？」

繁樹は、長めの黒髪が葵の頬に触れそうな位顔を近づけて、鋭い目つきを言った。

いつの間にか手には銀色に不気味に光った、長い刀のような物が握られている。

「大丈夫。久保田の心にある闇を斬るだけだから、痛みは感じない。まあ、あんたの存在自体が闇になりつつあるから、消滅はするかもしれないけど」

「・・・・・・」

葵は何も言えなかった。ただ繁樹の冷たい瞳をじっと睨みつけた。

「笹山くん」

急に屋上の入り口の扉の方から、声が掛けられた。そこには一人の女性が立っている。葵と同じ位の年齢の、おとなしそうな人だ。

「・・・世紀<sup>セキ</sup>」

繁樹は葵から目を放すと、今度は世紀という名前らしい女性に向かって言った。そして、「今回は見逃してやるよ」とボソッと言うと、サツと立ち上がり入り口からスタスタと姿を消した。

世紀は目線だけで彼を見送ると、ゆっくりと葵の方へ近づいてきた。

「大丈夫？」

世紀は葵に手を差し伸べながら、優しい笑みを浮かべて言う。

しかし葵は、世紀の手を取らずに、俯きながら黙ってしまった。見たところ、世紀は繁樹の知り合いらしい。彼女にも、何かされてもおかしくないのだ。葵には世紀を信じることができなかった。

「葵ちゃん・・・？どうしたの？」

世紀の言葉に、戸惑いがあるのが感じられる。

目線を動かしてみると、不安そうに自分を覗きこむ彼女の顔があった。

「……大丈夫。私は……その……笹山くんのようにはいし  
ないから。……大丈夫。……私を……信じて……？」

葵はその言葉に、少し驚いた。人から“信じて”と言われたことは初めてだった。葵は、この人は悪い人ではない、そう感じた。

「……ごめん。大丈夫だよ」

葵はスツと立ち上がると、スカートの埃を払い落としながら言った。

隣で世紀の表情が、緩んだのが分かった。

良く見ると、身長は葵より高く、大人っぽい雰囲気をもった女性であることが分かった。

「もう少しでお昼だし、お弁当食べながら一緒に話してもいい？」

「……うん」

葵は世紀の言葉に少し戸惑ったが、悪い気はしなかったので、一緒に食べることに決めた。

「じゃ、昼休みになったら裏庭に集合しよう？」

「……分かった」

そして二人は、それぞれの教室へ戻っていった。

「ごめんねっ！……葵ちゃん！」

葵が裏庭のイスに座って待っていると、慌てた様子で世紀がやってきた。

「待った!？」

「ううん。私もさっき来たところだから」

葵はそっけなく答えると、お弁当を広げ始める。

「……あのね、話したいことがあるんだけど……」

世紀は、葵の隣に腰を下ろしながらそう言う。

「・・・うん。なに？」

葵はお弁当のおかずを口に運びながらそれに答える。

「・・・あつ！！そうだ。その前に自己紹介しないかね。私は、有<sup>ウ</sup>水<sup>スイ</sup>世紀。ちなみに、あなたより一つ上の三年だよ」

世紀はそう言い終えると、曖昧に微笑む。

「私は・・・久保田葵」

葵はチラッと世紀に視線を合わせるとそう呟いた。

「・・・で、話したい事って何？」

「・・・葵ちゃんの・・・その・・・耳の事についてなんだけど・・・」

世紀は躊躇いがちにそう呟いた。

「！！！！」

葵の箸が止まる。・・・彼女にもこの耳が見えてるんだ。

「・・・だから何？私を馬鹿にしにきたの？」

葵は自分でも信じられないような怒りを覚えて、ガタツとイスから立ち上がる。その時、世紀の飲みかけのお茶がぐらぐら揺れて、テーブルから落ちた。

「・・・」

世紀は今にも泣き出しそうな顔をして葵のことを見上げている。

「・・・あ・・・」

世紀は何か言いかけようとしたが、葵の強い視線にたえられなくなつて、すぐに口を閉じた。

さすがに葵も、自分が悪く感じられて、すぐにまたイスに腰を降ろした。

「ごめん・・・」

「・・・ううん。大丈夫。葵ちゃんがそうなる気持ちも分かるから」

世紀は静かにそう言うと、落ちたお茶を拾ってテーブルにのせる。  
「・・・なんであなた達には私の耳が見えるの？」

葵が一番気にしていた事を聞いてみると、世紀は少しの沈黙のあ

と、口を開いた。

「……私達は選ばれた存在だから」

「選ばれた存在？」

「……そう。神様に選ばれた存在。信じられないかもしれないけど、私達は生まれたときに、特別な力を授かったの」

「どんな？」

葵は彼女の口から出る異様な言葉に顔をしかめ、そう尋ねた。

「……そうね。簡単に言えば人の心の闇を消す力。人は心の闇が多すぎると、魔界の人に目をつけられて、その住人にされてしまうの。だから葵ちゃんのその耳は、魔界の住人になる一歩手前。私達は今までそんな人たちを見つけて心の闇を消す手伝いをしてきたの」

葵は意味が理解できなかった。私が魔界の住人になる一歩手前？全然意味不明だ。つまりあのライトとギインは魔界の人ということなのだろうか。

「……だから私は、あなたを心の闇から救いたい」

「……」

「人には心の闇が必ずあるものだと思うの。でもそれに負けては駄目。人間は、辛いことや嫌な事、悲しい事が会っても前に進まないといけないの。逃げてばかりいたら、いつか心が闇に支配されてしまう。そしてそのままだと、私達がいる地上にいる権利を失ってしまうの」

「……」

すると、世紀は葵の目をじっと見据えた。

「たとえ、この世界にくだらなさをかんじてもね」

葵は言う言葉が見つからなかった。ただ黙って俯く。

「でも私には、葵ちゃんの心の闇を消す手伝いをしてあげられるわ」  
世紀が手を広げると、そこに十字架の形をした綺麗なキーホルダーのような物が現れた。

「笹山くんの場合は剣だったけど、私の場合はこれ。人によってこ



の形は変わるみたい」

その時始業のベルが鳴った。

「・・・本当は私達の力無しで心の闇を消せるのが一番なんだけどね」

世紀はそう呟くと「じゃ、またね」と言い残し、葵の前から立ち去った。

（心の闇を消す・・・）

葵は世紀の背中を見送ると、その場から腰を上げる。そう言われても、なにをどうすればいいのかわからなかった。けれど、これだけは分かる。

（このままじゃだめだ）

葵達が立ち去った後の、中庭に生える木の太い枝の上。そこにライトとギインは姿を現した。

「どうすんだよ！！ライト！！」

ギインはライトに向かって大声で怒鳴る。

「このままじゃ葵を“100人目の子供”にできないぞ！！」

しかしライトは、ギインの顔を見てもただいつものように微笑むだけだ。

「あーったく！！協力してる俺の身にもなれよ！！」

「・・・そんなにイライラしていると血圧あがるよ？」

ライトは落ち着いた口調でそう言つと、馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

「-っ！！-」

「・・・大丈夫。葵は心の闇には勝てないから」

ギインは目を丸くしてライトを見る。

「そのためには、ちょっと手を加える必要があるけどね」

「葵ちゃん!!」

葵が教科書をカバンに入れ、帰る支度をしていると透子が話かけ  
てきた。

「今日すごかったね〜!私びっくりしちゃた!」

葵は今日、国語の時間に言った事を思い出した。  
あれはやばかった。葵は今になってそう感じた。

(きつと皆、私を軽蔑した目で見るに違いない・・・)

「すごいすつきりした!!私もあの先生ウザイと思ってたんだよね  
」

「・・・!」

葵は少し驚いた。透子はそんなふうに思ってくれていたんだ。少  
し嬉しい。

「んじゃ、私部活あるからまたね〜!」

「うん、またね」

葵は手を振って透子を見送った。

次の日。葵はいつものようにベッドの中で目を覚ました。今日は  
土曜日なので学校は休みだ。

葵はどちらかというと、友達と出かけるたりするより、家で本を  
読んだりテレビを見たり、音楽を聴いたり・・・などをして休日

過ごすのが好きだった。

他人とかかわるのが嫌い・・・という意味ではなのだが、誰かとい  
るより一人でいるほうが落ち着いた。

「おおちゃん！起きてるう？」

一階から清音の声が聞こえてきた。葵は眠たい目をこすりながら  
返事をする。

「うん。起きてるよ」

「んじゃーちよつと下降りてきて。話したいことあるから！！」

「ん。はいはい」

葵はもう少し寝ていと思ったが、目がさえて寝る気にもなれなっ  
かたので、しかたなく一階へ降りていった。

「ねえねえ！今日、うちの大学でオープンキャンパス開くんだけど、  
おおちゃん来ない？」

「・・・は・・・」

葵ははつきり言って大学には興味がなかった。まあ将来の夢も無  
いので当たり前的事かもしれないが。

「まだ、将来の夢とかないんでしょ？それなら、この機会に何かや  
りたい事とか見つかるかしんないよ？」

「・・・」

たしかに、そうかもしれない。少なくとも、何もしないよりはま  
しだろう。

「うん。・・・分かった。行くよ」

清音は一瞬、驚いたように目を見開くと、そのあとにつこりと笑  
った。

「よしー！！じゃ、着替えてきて！すぐ出発するから」  
「うん」

そして葵は、着替えるために再び二階へと向かった。

「ほーらー！あおちゃん。ここが私が通ってる大学よー！」

清音は二人の目視界に入ってきた茶色の建物を指差すと、嬉しそうにそう言う。

「ふーん」

葵はそつけなく答えると、周囲をぐるりと見渡した。そこには、公園に生えてそうな木が何本か並んでいて、その奥には大学の建物が、ずらっと並んでいる。・・けっこう大きな大学らしい。

そして葵のすぐ隣では、噴水が水しぶきをあげていた。

（へー。大学って重苦しいイメージがあっただけ、緑もいっぱいあって、大きな公園？みたい・・・）

「ねえ。お姉ちゃん」

「・・・」

「お姉ちゃん？」

姉からの返事がないので、不安になって振り返ると、案の定、そこにはさっきまでいたはずの清音の姿が消えていた。

「・・・まじ・・・！？」

周りを見ても知らない顔ばかり。葵は完全に清音とはぐれてしまった。

葵はその場に立ち尽くすことしかできなかった。

・・・さて。これからどうするべきか。

はぐれたあたりの周辺を歩き回ったが姉は見つからなかった。

携帯もつながらない。周りが騒がしいので聞こえないのだろう。

きつとあつちは、葵が勝手についてくると思って後ろを気にせず行ってしまったに違いない。

「はー・・・」

葵は深いため息をついた。

（こんな事になるなら来るんじゃなかった）

と、その時後ろから肩をたたかれた。驚いて振り返ると、そこには爽やかな笑みを浮かべて立っているライトの姿があった。

「ライト！」

葵は少し安心した。こんな時、知っている人に会えると安心するものだ。

「・・・こんばんは」

葵は顔をしかめる。

また“こんばんは”？今は昼間なのに。

「・・・ふふ。今、何で昼間なのに“こんばんは”なんだろう？って思ったでしょう？」

「・・・え・・・」

「・・・つまりね。僕たちには“こんにちは”と言う権利がないんだ。

“こんにちは”は光で溢れる日中に言うもの。闇に心を支配され、魔界で生きている僕たちにとっては言う権利も無いし、必要のない言葉なんだよ」

「・・・」

（必要の無い言葉？）

するとライトは葵の顔を覗き込む。

葵は驚いてライトの目を見たまま固まった。良く見ると、外国人

のようなブルーグレーの瞳をしている。

「わかった？ 葵」

「・・・う」

葵は思わず後ずさる。

「ふふ。そんなに警戒しなくていいのに。とって食べたりしないから」

ライトは明らかに笑いをこらえていた。

葵はむっとして顔をしかめた。どう見てもライトは自分の反応を楽しんでいる。

（・・・っていうか、さっき“魔界で生きてる”って自分の事言ってた・・・？ やっぱり、ライトは世紀さんが言ってた“魔界の人”ってこと・・・？）

「・・・ライトは“魔界の人”なの？」

ライトの顔が一瞬、歪んだように見えた。しかしその顔は、すぐにいつもの笑顔にかき消される。

「そんな可愛い耳をしている葵のほうが“魔界の人”っぽいけどなあ」

「・・・」

「変って思ってるみたいだけど、僕はかわいいと思うよ」

「-・・・！」

葵はお世辞だとしてもその言葉が少し嬉しかった。顔がほのかに熱くなるのを感じる。

人からかわいいと言われたのは初めてだった。葵は恥ずかしくなっ  
つて思わず顔を伏せる。

「それじゃ、行こうか？」

「・・・え・・・」

「来るんじゃないかったって思ってたんでしょ？」

「・・・」

（っていうか、なんで私が思ってること分かるの）

「・・・葵の顔見れば大体考えてる事が分かるんだよね」

「!・・・」

すると突然右手をつかまれた。そしてライトは葵の手を引っ張ると、歩き出す。

「-っ・・・」

葵が軽く声を漏らしても、ライトは気に留める様子もなく、どんどん前へ進んでいく。

しばらく進んだところで、葵はもう我慢できなくなった。

「ちよつと!!放してよ!!」

葵はライトの手を無理やり振り解いた。

「・・・どうしたの？」

ライトはまるで罪悪感の無い顔で葵を見つめてくる。

「・・・だって、お姉ちゃんが探してるかもしれないし・・・」

「・・・そうかなあ」

「え？」

するとライトはにんまりと口元に笑みを浮かべた。

「だって、ここはそのお姉ちゃんの学校なんでしょ？お姉ちゃんも偶然に友達と会ったりなんかして、そんなに葵の事気にしてないかもしれないよ？」

「・・・」

（たしかに・・・そうかもしれない）

清音は、どちらかというと忘れやすい性格だ。今頃、大学の友達と楽しくおしゃべりに没頭していてもおかしくない。

「・・・それなら、必死に探しても自分が馬鹿みたいじゃないか。

「ね？そうでしょ」

「・・・うん」

葵はぽつりとそう呟いた。

「じゃ、いこうか」

ライトは再び口元に笑みを浮かべると、葵の手を引き歩き出した。（どうせ、こんな所にしても将来いくと決まったわけでもないし、意味がない。こんなくだらない所にいるなら、違う場所で過ごした

「ほうがましだ・・・」

行き先は分からない。けれどそれはライトに任せることにした。特別行きたい所があるわけではなかったし。

その時、ライトがいつもとは違う、奇妙な笑みを浮かべている事に葵は気付くはずもなかった。

「あおちゃんどこ？」

そのころ、清音は葵の名を半分あきらめながら呼び続けていた。もうこれを始めて30分以上はたっているだろう。これも自分が、後ろを確認せず、勝手に歩いて行ってしまったせいなのだが。

（きつと、こんな初めての場所に一人じゃ不安になってる・・・早く見つけてあげないと・・・）

と、その時誰かに服の裾を掴まれた。

「!？」

驚いて振り返ると、そこには小学3、4年生くらいの少年が今にも泣き出しそうな顔で立っていた。

「・・・どうしたの？」

清音はどちらかというと、子供が好きなほうだ。こんな泣き出しそうな少年を見て、ほっておけるはずもなかった。

「ぼっ・・・僕の風船・・・」

そう言くと、少年は少し先にある木を指差した。そこには赤い風船が引っかかっている。

「よしよし。今、取ってあげるからね」

清音はなだめるように言くと、その木まで少年の手を引いて歩く。「取ってあげるからここで待っててね」



清音はそう言つと風船を取りにかかった。風船は、あと少し手を伸ばせば届きそうな枝に引っかかっている。

（あと少し・・・）

清音は精一杯手を伸ばす。その時、後ろから伸びてきた誰かの腕が清音の首を引きよせた。

「！！！！えっ・・・」

驚いて肩越しに振り返ると、そこにはさっきまで泣いていた少年の顔があつた。それも彼は重力を無視して、清音の背の高さまでフワリと浮かんでいる。少年は清音の顔を見るなりニヤリと笑つた。

「ごめんね、おねーちゃん！！」

そう言つたかと思うと、少年は清音の首に自分の口を近づけた。

その瞬間、首筋に何か鋭い痛みがはしる。

「っっ・・・？」

清音は声にならない叫びをあげると、そのままうずくまり気を失つてしまった。

「・・・まあ、オレの牙にかかれば、今まであつたことは忘れて眠る事ができるから安心しなよ」

得意そうな笑みを浮かべて立っている少年　ギインがそう呟くと、ほぼ同時にその体がシュルシュルと親指くらいの大きさに縮んだ。

「それにしても、大きさを覚えて実体化するのは疲れんなあ」

ギインは首をコキコキと鳴らすと、「邪魔者排除」

と呟いて人ごみの中へ姿を消した。

ライトはまだ歩き続けている。もうさっきまでいた大学は、葵達のはるか後方に見える位になってしまった。

葵はただライトに導かれるままに歩くだけだ。そして二人は、人

通りの少ない裏路地にさしかかった。

「ねえ。ライト・どこ行くの？」

葵はライトの背中に向かって控えめに声をかける。

「ふふつ。秘密！」

ライトはニコニコと笑みを浮かべながら答えた。そしてまた、何事もなかったかのように歩き続ける。

葵にとって、ライトはいつも笑っているように見えた。いつも不機嫌な顔をしている葵とは大違いだ。

それとも・・ライトは心に持っている闇をしまいこんで、表面だけで笑っているのだろうか。

葵にとってライトは“本当の自分”を隠しているように見えた。笑顔は本当の自分を隠すものにすぎないのかもしれない。葵はそう感じた。

「さて・・もうそろそろいいかな」

ライトは独り言のように呟くと歩みを止める。そして腰をかがめると、視線を合わせるように顔を葵の正面までもってきた。

「！」

葵は驚いて反射的に顔を背ける。

（いったいなんなの・・）

後づさろうとしたが、腕をしっかりと捕まれていて動くことができない。すると、耳元で甘く囁くような声が聞こえてきた。

「・・この世界って、本当にくだらない事だらけだね」

「・・・・・！」

「ここじゃない、別の世界に行ってみてもいいと思わない？」

その声は葵の心のなかに優しく響きわたった。

ここじゃない、別の世界が本当にあるとしたら、葵は行ってみたかった。こんなくだらない世界からなら、別に逃げ出してもかまわないかもしれない。

「葵、僕の事をみて」

またあの優しい声が聞こえてきた。葵はその声がする方へ、ゆっ

くりと顔を動かした。

「おい！！久保田！！」

突然、怒鳴り声が葵の耳に飛び込んできた。反射的に振り向くと、そこにはクラスメートの笹山繁樹が仁王立ちで立っていた。

「んなところで、なにしてんだよ！？」

「・・・・・・」

「それにあんな奴と」

繁樹は不機嫌にそう言うと、顎でライトの事を示す。

ライトは掴んでいた手を離すと、ニコツと微笑んだ。

「へえ。君には僕が見えるんだ」

「つたりめーだろ。お前は魔の存在だからな」

繁樹は奇妙な笑みを浮かべると、手を前に差し出した。

するとそこに、一本の刀が現れた。全身が銀色に輝いていてとても綺麗な刀。たしかあの時、屋上で持っていたものだ。

「へえ。今でも“カリウド”の一族がいたとはね」

ライトはそう言うと、フワッと浮き上がって繁樹の前に着地した。

（へっ！？今っていったいどういう状況！？ていうか、ライトって普通の人には見えないの？）

葵は意味が分からなかった。出来ることといえば、ただ今日の前で起こっている事を呆然と見守ることだけだ。

「そんなに余裕でいいのかよ？あ？」

そう言うと繁樹は、刀の刃をライトの首筋に近づける。あと数ミリ動かせば切れる位置に、ライトの首があった。

ライトは動じる様子もなく、腕を組むとかすかに微笑んだ。

繁樹の表情が歪んだのが分かった。

「ふふ。君こそ余裕そうだけど大丈夫？」

ライトがそう言った途端、繁樹は素早く刀を振り下ろした。

ライトはそれを軽くかわすと、後ろにあった塀にふわっと飛び乗った。

「-チツ・・・」

繁樹は軽く舌打ちをすると、ライトの乗っている塀を刀で切り刻んだ。そして休む間もなく、バランスを崩したライトに向かって刀を振り下ろす。

「・・・っあ・・・」

葵は軽く声を上げたが、塀が崩れた時の砂埃で二人の姿を確認する事ができない。

「すごいねえ。その刀、塀も切ることができるんだ」

砂埃の中から馬鹿にしたような声が聞こえてきた。

良く見ると、砂埃の中に二つの人影が立っているのが見えた。

「！」

葵は目の前で起こっている事が信じられなかった。

繁樹の振り下ろした刀が、ライトの前にかざした手の直前でピタツと静止している。まるでライトの手の前に、見えない壁があるようだ。

繁樹の刀が力を入れているのにもかかわらず、静止した状態でプルプルと震えているのが確認できた。

「悪いけど、僕には魔力というものがあるんだよね」

ライトは睨みつけている繁樹に向かって、ニコツと微笑んだ。

「・・・それじゃ、今度は僕からいこうかな」

ライトがそう言うとはば同時に、前にかざした手から針のようなものが何本も、繁樹の顔を目掛けて飛び出した。

「っ！！！」

繁樹は刀で防ごうとしたが間に合わず、それを横にジャンプしてかわす。

「ふふ。よく避けられたね」

ライトはそう言うのと、今度は両方の手を刺激に向かって突き出した。

「・・・くそっ」

繁樹はそう呟くと、再びライトに向かって刀を構える。その顔には、さっき斬ったのだろう、血が滲んでいた。

（・・・どうしよう。このままだと、繁樹くんが危ない・・・）

葵は、このままでは繁樹が一方的にやられて終わるだろう、そう感じた。

「ちよっと・・・」

葵は二人に向かって控えめに声を掛ける。

「久保田は口出しすんじゃないねえ!!」

葵の言葉を聞き取った繁樹が、イライラした様子で葵の言葉をさえぎった。

（そう言われても、あんたが負けそうだから声を掛けたんですケド・・・）

負けを認めて諦めてしまえば楽なのに、葵はそう感じた。繁樹も自分が不利な立場にあるのは分かっているはずだ。

それなのに、なぜ向かっていけるのだろう。

「・・・ふふ。良く頑張ったね。繁樹くん・・・?」

ライトは突き出していた手を引くと、そう呟いた。

「は?」

繁樹はその言葉に目を丸くする。

「僕、こういう戦いはあまり好きじゃないんだ。だから今回は終わりにしよう」

「・・・逃げんのかよ?」

「別にそういう意味じゃないんだけどなあ」

「・・・」

すると繁樹の持っていた刀が、スッと手の中から消えた。

「今回は諦めてやるよ」

「ふふ。それはどうも」

睨みつけている繁樹に対し、ライトが微笑んで答えた。

（よかった）

なんとか、二人の戦いが終わった。これもライトが自ら引いてくれたお陰だ。葵は少しライトに感謝した。

「来い!!!久保田!!!」

「はっ？」

繁樹は乱暴に葵の手を掴むと、大股で歩き出す。

「っ・・・ちよつと！」

葵がそう言っても、繁樹はそれを無視して歩き続ける。葵は後ろを振り返った。

そこには、微笑んで立っているライトがいた。

「また迎えに来るよ」

ライトはそう言うのと、その場から消えた。

「私の事は斬らないの？」

葵は、繁樹に無理やり連れてこられた公園のベンチに腰をおろすと、静かに問いかけた。

「・・・おまえを生かしておけば、またアイツが来るかもしれないしな！！」

繁樹はぶっきらぼうにそう答えた。

「・・・」

そして葵と少し離れた場所に、どかっとな腰を下ろした。

「・・・つか、アイツにのこのこと、ついていくなよ！」

繁樹は葵とは目を合わさずに、前を見て言った。

「・・・何で？」

「アイツはお前を魔界に連れて行くに決まってるだろうが」  
「！・・・」

葵は“魔界”という言葉聞いて少しドキツとした。ライトは魔界の人であることを忘れかけていた。

「世紀から聞いてねーのかよ。アイツは久保田を魔界の住人にして、魔界に連れていこーとしてんだよ」

葵は息を呑んだ。世紀はたしかに、そのような事を言っていたような気がする。

「まっ。それは久保田の気の持ちようでなるか、ならないかは決まってくるけどな」

「・・・」

「いつまでも心に深い闇を持ってちゃあ、本当に魔界の住人になっちまうぞ？」

「・・・分かってる・・・」

葵は下を向いてぼそつと呟いた。もうそんな事は世紀に聞いて知っていた。でも心に深い闇を持たないようにするのはどうすればよいのだろうか。

葵にはその答えが見つからなかった。

（・・・もう私には無理なのかもしれない・・・）

このまま魔界の住人になった方がましだろう。

葵はそう思った。

「知ってるか？人は誰でも心に闇を持つてるものなんだぜ？それをどうやって乗り越えていくかが問題なんだよ！！」

繁樹は前を見据えて力強くそう言った。

「・・・」

葵は繁樹の横顔から視線を外す。

（“どう乗り越えるか”か・・・）

「・・・」

「！」

その時、ポケットに入れておいた葵の携帯が鳴った。

「あつ。ごめん」

葵はそう言つと、繁樹に背を向けて携帯にでた。

「もしもし」

あっ！あおちゃん！？

「お姉ちゃん？」

葵は姉の声を聞くと、罪悪感に襲われた。姉を大学に残して、出てきてしまった事が頭をよぎった。

今何してるの？

「・・・ごめん」

え！？

「だって私、お姉ちゃんを残して先に大学出ちゃったでしょ？」  
すると、少しの沈黙のあと再び声がした。

ん。そうだっけ？私、今日大学には行ったけど、あおちゃんと  
は行っていないような気がするけど・・・

「は・・・？」

それより、こんな時間まで何してるの？早く帰って来てよ！  
「え。ちよつと・・・」

その瞬間、電話は切れてしまった。

姉が自分と一緒に大学へ行った事を覚えてないという事は、どう  
いう事なのだろうか。葵には意味が分からなかった。

・・・それとも、これはライトの仕業なのだろうか。

「おい！！もう帰れっていう電話じゃなかったのか！？」

葵の隣で繁樹はそう怒鳴る。

「えっ・・・まあ」

「それなら、とつとと帰れ！」

そして繁樹は足を組み、再び視線を前に向けた。

「あ・・・じゃあ、帰るから」

葵はここにいても仕方ないと思ったので、ベンチから腰を上げた。  
「じゃ・・・またね」

一応、控えめに声をかけると、葵は視線をチラッと繁樹に向けた。  
「・・・おう」

繁樹は視線を前に向けたまま、それだけ答えた。夕日に染まった  
彼の顔は、少しだけ寂しそうに見えた。



### 3 光から闇へ

ライトは自室のベッドで天井を見つめていた。

ここは魔界。魔界といっても、光で溢れている地上とほとんど変わりはない。違うことといえば、朝が来ない事。光が無いことだった。そしてそれは、ここに住む人達にとっては普通で当たり前な事なので、気にならない事だ。むしろこの住人は、この暗闇を心地よく感じている。

・・・ライトを除いては。

ライトは天井から目を外すと、寝返りをうつた。

「おい〜!!ライトお〜!!」

とそこに、ギインがいら立ちの混じった声でドアを乱暴に開けて入ってきた。

「なに?ギイン」

ライトはギインとは目を合わせずに、天井を再び見ると、静かにそう答えた。

「んだよ!地上にいるときはいつもニコニコしてるのにさあ〜」

「・・・話があつて来たんでしょ?」

ライトはそう言つと、ベッドから起き上がりそこに腰を下ろす。

ギインは自分の話が流されたことに腹を立てたのか、ぶすつとした表情になると、人差し指をビシツとライトに向けた。

「どうして葵を連れて来なかったんだよ!?せつかく俺が邪魔者を排除したのに!」

「・・・・・・・・」

「もしかして諦めたとか!??」

「……んゝなわけないでしょ！」

ライトは伏せていた顔をギインに向けると、奇妙な笑みを浮かべて言った。そして「自分で決めたことだしね」とそこに付け加えた。

「だよなっ!!」

ギインは安心したかのように言うと、ライトの隣にどかっとな腰を下ろした。

「ところでさあゝ。三丁目にでっかいデパートができたらしいぜ！  
！そこ一緒にいかねえ？」

ギインは目を輝かせながら、ライトの目を覗き込むとそう言った。

「……」

しかしライトは、ギインの方は見ずに、ただ前をじっと見つめているだけだ。

「……ライト、聞いてるか？」

「……ギインはいいよね」

ギインはライトの突然の言葉に眉をひそめる。

「いいって何が……」

「何も……」

「久しぶりだな。ライト？」

ライトがその言葉を言い切る前に、部屋の入り口から中年位の男の声が聞こえてきた。

視線を向けると、そこには大柄な男が立っていた。その髪は肩につきほど長めで、それを後ろでポニーテールに縛っている。そしてそれは、炎のような真っ赤な色に染まっていた。

「……ごめん。ギイン。外してくれるか？」

ライトは表情を曇らせ、そう呟く。

ギインはその場の雰囲気を感じてか、素直に「分かったよ」と言っ  
て部屋から出て行った。

「お前のさっき言おうとしていた言葉は、ここでは禁句だったはず  
たぞ？」

その男は髪と同じ色の真っ赤な瞳を細めて、重みのある声でそう言

う。そして、さっきまでギンが座っていた場所に静かに腰を下ろした。

「分かってます・・アフューカスさん」

ライトは落ち着いた声でそう言った。

「・・しかしこの部屋も何も変わってないな。ベッド以外、何もありやしない」

その男 アフューカスは周りを見渡すと、口元に笑みを浮かべながら言った。

ライトは彼と目を合わさずに、目の前の壁に視線を向ける。

・・ライトはこの男の目を見るのが嫌いだ。あの時を思い出すから。地上にいた自分を思い出すから。闇に染まってしまった自分を思い出すから。

・・・そう、彼こそが自分にこの世界を与えた人物だった。“光”に居場所がなくなつた自分を“闇”に連れてきた人物だった。

そしてライトは再び光に戻りたかった。

あの人に会うために。自分を心から信じてくれたあの人に。

「光流<sup>ヒカル</sup>！起きてるの？朝ごはん、早く食べちゃって！」

朝、目を覚ますと母の呼ぶ声が聞こえてきた。

「はい」

光流はまだ完全に覚めてない目をこすりながら、返事をする。そして軽い足取りで一階へと降りていった。

そう。ライトは光流だった。地上にいた頃は。

「おはよ。お兄ちゃん」

「おはよう。美森<sup>ミモシ</sup>」

すでに向かい側の席で朝食を取っていた、妹の美森が可愛く笑っていつものように挨拶をする。

そして美森は素早く箸を動かして、ご飯を口に放り込んだ。

「何か用事でもあるの？」

光流は味噌汁を一口啜ると、美森に問いかけた。

「ん。今日から合唱部の朝練があるんだ」

美森は口をもぐもぐさせながら、忙しそうに答えた。

「あら。確か、もうすぐコンクールだったわよね？」

さつきまで台所に立っていた母が、自分の朝食を持って光流の隣に腰を下ろした。

「うん！去年は補欠で出られなかったけど、今年は出させてもらえと思うんだ」

美森は箸を止めると、目を輝かせて弾んだ声で言った。

「ねっ！？お兄ちゃん、私頑張るから、本番見に来てね。母さんと父さんと一緒に」

光流は美森が合唱部に入ってたのは知っていたが、歌っている姿を見た事は一度もない。

「うん」

光流はそう答えると、美森に笑いかけた。

そして美森も光流に笑い返した。そして再び美森は、忙しそうに箸を動かし始める。

光流はその笑顔を、決して失わせてはいけないと思った。

兄として。

家族として。

「いつてきまーす!」

美森はそう言うと、居間のソファーに置いてあったカバンを掴んで、玄関から飛び出していった。

「いつてらっしゃい!」

母はそう言うと、「いつも美森はあわただしいんだから」と呟いて、洗い物を片付けるために流し場へ向かった。

「そっだね」

光流は笑みをこぼすと、制服に着替えるために席を立つ。

「光流もそろそろ準備しなくて大丈夫なの?」

「うん。今からするところ」

光流はそう答えると、二階へ上がるために階段へ向かった。とその時、二階から降りてくる足音が聞こえてきた。

「おはよう。父さん」

光流は父に声をかけると、スタスタと二階へ向かった。

「・・・おー」

父は視線で光流を見送ると、頭をポリポリとかきながら台所のテーブルに置いてあった新聞を手に取り、イスに腰を下ろした。

「今起きたんですか?」

母は洗い物に視線を向けながら、静かに父に問いかけた。

「まあ・・・」

父はそっけなく答えると、顔を隠すかのように新聞を広げて読み出した。

「美森は・・・?」

「もう出かけましたよ」

「・・・そうか」

そして母は父の前に、静かに味噌汁とご飯を置いた。

「あなた・・・」

そして思いつめたような顔を見ると、静かに口を開いた。

「いってきまーす」

とそこに光流が、台所の扉から顔を出して二人に声をかけた。

「いってらしゃい」

母はいつものように微笑むと、光流を見送った。そして玄関の扉の音を聞くと、再び静かに口を開いた。

光流はいつものように、学校へ続く道を一人でもくもくと歩いていた。

光流は今年、高校三年で受験生だ。“受験生”という言葉は光流にとってあまり苦痛ではない。将来の夢があり、それを叶えるために努力する。その事に光流は幸せを感じるからだ。

夢があるから頑張れる。光流はそう思っていた。そして、いつものように校門をくぐった。

その日の放課後。

光流は参考書を選ぶため、街中にある書店に来ていた。そして手頃なものを手に取ると、レジで会計を済ませる。

（今日も帰って勉強だな）

大学受験までまだ日はあるが、今のうちから勉強をされていて越したことはない。

そしてエスカレーターを下ろうとした所で見覚えのある姿を発見

する。

（美森・・・？）

横で一つに結わえた黒髪。そして毎日目にしている中学の制服。彼女は間違いなく美森だ。

（何でこんな所に・・・）

美森は今、エスカレーター近くにあるゲームセンターにいた。そして一番手前にあるクレーンゲームに熱中している。

（話しかけてみるか）

光流はそう思い、美森に近づく。

普通なら、今の時間、美森は部活動に取り組んでいるはずだ。こんな場所にいるなんてこと、まずあり得ない。

「・・・」

その時、美森の影から一人の少年が姿を現した。学ランに身を包み、小柄でおとなしそうな顔をした彼は美森に何か話しかけると、楽しそうに笑う。そして美森もそれにつられるようにして笑った。

（友達と一緒になのか・・・）

光流は足を止めると、二人の様子を窺う。二人は光流に気づく様子はなく、たった今クレーンから落としてしまった縫いぐるみについて盛り上がっているようだった。

（放課後、友達と遊んでも別に普通だよな）

光流はため息を漏らす。よく考えてみれば、部活動が何かしらの都合でなくなる可能性だって十分にあるのだ。だから、こんな場所にいても全然不思議じゃない。

（帰るか・・・）

少し寂しいのは気のせいではないだろう。

「！！」

その時、美森の隣にいた少年と目があつた。

彼は肩越しに光流を見ると、口元に笑みを浮かべる。

光流はドキリとして素早く視線を外すと、足早にエスカレーターに乗り込んだ。

（何なんだ・・アイツ）

光流は何とも言えない気持ちを抱きつつ、エスカレーターを下る。  
・・・そんな柄の悪そうな人間ではなさそうだし、問題はないだろう。

その時はそう思った。

その日の夜。

光流は父親と母親と共に夕食を食べていた。しかし空いている席が一つ。そこに座るはずに美森の姿はなかった。まだ家に帰ってこないのだ。

「美森から何も聞いてないの？光流」

母はその場の沈黙を破り、そう尋ねる。

「・・・ああ」

光流は端的にそう答えた。

「部活が長引いているのかしらね・・・心配だわ。学校に連絡入れたほうがいいかしら・・・」

「大丈夫だよ。美森のことだから、きつとすぐに帰ってくるよ」

光流は母親に微笑んでみせる。きつと、男友達と遊んでいた、と言ったら余計に心配するに違いない。

今頃、美森は何をしているのだろう。光流は脳裏によぎった嫌な考えを頭の隅に追いやる。

・・・でも、きつと美森なら大丈夫だ。あんなに合唱に一生懸命な美森なら。きつとすぐに帰ってくるだろう。

光流はシャーペンの動きを止めた。時計を見ると、やく午後10



時。・・・美森はまだ帰ってきていない。

光流はさすがに心配になってきた。あの少年の笑みが脳裏によぎる。

（美森・・・いったい何しているんだ）

その時、一階から玄関の扉を開ける音がした。

「!-・・・」

帰って来たのは美森のようだ。母親と玄関で話している声がする。そして次に階段をゆっくり上がってくる音がした。

「-・・・」

光流はシャーペンを置き、イスから腰を上げる。そして自室の扉を開けた。

「!・・・お兄ちゃん・・・」

美森は突然現れた光流に驚いたのか、大きく目を見開く。しかしそれはすぐに光流の視線から逃げるようにして伏せられた。

「こんな時間まで何してたんだ?・・・心配したんだぞ」

光流はできるだけ平常心を装い、そう問いかけた。まさか、こんな時間まであの少年と遊んでいたとでもいうのだろうか。

「っ・・・ごめんねっ・・・心配かけちゃって・・・あのね、部活が終わった後、友達と本屋さんに行ったの。そしたらいつの間にかこんな時間になっちゃって・・・」

美森は困ったように微笑んだ。

「・・・嘘だろ?」

光流自信にもこの感情はもう抑えることはできなくなっていた。

「今日は部活なんて行ってないんだろ!?そして遊んだ。男友達とゲームセンターでな!!」

美森に対してこんなにも自分の感情をぶつけたのは初めてだ。悲しみと怒りが心の中で真黒な渦を巻く。

すると美森の表情が悲しみにゆがんだ。

「っ・・・ごめんねっ・・・でもね、私・・・」

「部活はどうしたんだよ!?あんなに頑張ってただろ!?!」

美森の顔を見、心が痛んだが、今はそんな事気にしている余裕なんてなかった。自分の感情はもう、自分自身にもどうすることもできない。

「・・・私、部活、辞めてきたの」

美森はとても言い辛そうにそう呟いた。

「・・・!」

「あのね、私ね・・・」

「美森がそんな事するなんてな。部活を辞めて男と遊ぶなんてサイテーだよ・・・」

すると美森はとても悲しそうにその顔を歪めた。

「っ・・・お兄ちゃんなんて大嫌いつ!!!」

震える声でそう叫ぶと、美森は光流の前を通り過ぎ、自分の部屋に飛びこんだ。

「っ・・・」

光流は閉じられてしまった、美森の部屋の扉を見つめることしかできなかった。

次の日の朝。

光流は目を覚ました。枕元の時計を確認すると、すでにお昼を回っている。しかし今日は土曜で学校はないので問題はない。

光流はのろのろと重い体を起こした。昨日、あんなことがあったせいでよく眠ることができなかった。

今、光流の心を支配しているのはあの時のような真黒な感情ではなく、静かすぎる後悔だけだ。何である時、自分の感情を抑えることができずに美森を傷つけてしまったのだろう。もう一度、美森と話がしたい。

（・・・妙に家の中が静かだな）

もうお昼を回っているというのに、下からは何の物音もしない。

光流はその妙な静けさに違和感を覚え、ベッドから抜け出すと一階へ降りて行った。

リビングの扉を開けると、そのテーブルに母だけがポツリと座っていた。どうやら光流が入ってきたことに気づいてないようだ。

「母さん？」

「光流・・・おはよう」

母は光流の顔を見ると、力なく微笑む。

「美森は？・・・それに父さんは出かけたの？」

「・・・ええ。二人して買い物に行くって・・・」

母は光流から目をそらすと、静かにそう答える。

「そうなんだ・・・」

光流は妙な空気を感じ取りつつも、母の隣を通り過ぎ、キッチンのあるスペースに向かった。

「何か作ろうか？」

母はそう尋ねる。

「んん・・・大丈夫だよ。適当に食べるから」

光流は買い置きしてあった菓子パンを手に取り、コップに麦茶を注ぐと、再び母の隣に腰を下ろす。

そしてパンを食べきった頃、母が口を開いた。

「美森、合唱部辞めて来たって今朝、話してたわよ」

「・・・！そうだね」

光流は昨夜のことを思い出す。美森はとても辛そうにそう話していた。あんな大好きな合唱を辞めただなんて、何か大きな理由があるはずなのに・・・でも自分はどうだろう。ただ、その時の感情に流されて美森を傷つけただけだった。

「美森、あんなに楽しみにしていたコンクール、出してもらえなくなっちゃったんですって。音程をとることがなかなかできなくて、

皆と一緒に歌うと、音の響きを邪魔しちゃうって先生に言われたらしいのよ」

「……!」

「いつも遅い時間まで残って練習してたのに……」

光流は大きく目を見開いた。……こんな事があつたなんて、全く知らなかった。美森はこんなにも傷ついていた。それなのに自分は美森の話を聞こうともせず、さらに美森の心を傷つけた。

自分はなんて愚かなのだろう。守るはずの笑顔を奪ってしまうなんて。

「母さんっ……美森と父さんはどこへ出かけたか知ってる!？」

光流はその場に立ち上がる。今すぐ美森に会って、話をしたい。謝りたい。

「……分からないわ……」

「!?!じゃ、何時くらいに帰ってくるかは……」

必死にそう尋ねる光流の顔を母は見ようとしめない。そして長い沈黙のあと、母は呟いた。

「二人はもうこの家には帰ってこないわ」

「!?!?」

「光流と美森は気づかなかったかもしれないけど、私と父さんの関係は前からうまくいってなかったのよ。今日、父さんは家を出て行った。父さんを一人にするのが嫌だからって、美森のそこについて行ったわ」

「え……?」

光流の口からは掠れた声しか出てこなかった。母は……母さんは何を言っているんだ!?

「ごめんね。光流」

光流はその言葉で確信した。もうこのテーブルに四人の家族が揃うことはない。今までの当たり前前の日常は一瞬にして消え去った。

「……!!何でだよ?!」

光流はそう叫ぶ。しかし母は顔を上げようとはしない。

「ふざけんなよっ！！なんで・・・なんで・・・二人を引きとめなかつたんだ！！何で美森を出て行かせたんだよっ！！？」

光流はこぶしを握り締め、母を睨みつける。そして家を飛び出した。

光流は住宅街をふらふらと歩いていた。

家には帰りたくない。このままどこへ行っているのかも分からなかった。ただ、今は美森と当たり前の日常を失ったことで心の中に大きな穴が空いてしまったようだった。

「こんにちは。美森ちゃんのお兄さん？」

「-!-」

声をかけられて光流は歩みを止める。そこには昨日、美森と一緒にいた小柄な少年がいた。彼はコンクリートの塀に寄り掛かり、光流を見つめている。

その時、光流の心に激しい怒りが沸き起こった。こいつが・・・美森と会ってからすべてがおかしくなりだした。こいつと美森が会わなければ、自分が美森の笑顔を奪うなんてこと、まずあり得なかったのに。あんな別れかたをせずに済んだのに。

「昨日はどうも。美森ちゃん、元気なさそうだったから、遊びに誘ったんだ。でも分かれる頃には元気になっていてくれたみたいでよかったよ。・・・あれ？どうしたの？お兄さん」

その瞬間、光流は彼の襟元を掴み、コンクリートの壁に押し付けた。

「ふざけんなっ！！！！お前が美森をたぶらかさなければこんな事にはならなかつたんだよっ！！！」

・・・そう、すべてこいつが悪いんだ。美森の笑顔を奪ってしまったのもその苦しみに気付けなかったのも、すべてこいつが原因ではないか。

光流はさらに彼の襟元をきつく締め、堅い壁に押し付ける。心の

中は今までにない怒りと殺してしまいたいくらいの殺意で満ちていた。

そして光流はこぶしを高く振り上げる。その瞬間、大きく目を見開いた。

・・・彼は笑っていた。

「やはり俺が目をつけていただけあるな」

彼は口元をつりあげ、そう言うと、自分の襟元を掴んでいた光流の手首を力強く握る。

「っっっっ！」

光流は思わぬ激痛に彼から手を離れた。

その瞬間、彼は光流の襟元を掴み、乱暴に引き寄せた。そしてみるみるうちに彼の黒髪は真っ赤に染まり、その背丈までもが光流より大きく大柄な男性のものになった。そして地についていた光流の足は、宙に浮く。

光流は自分の目を疑った。彼 アフューカスは人間ではない、そう感じた。

「離せっっっ！」

光流はアフューカスの体を思いきり蹴り飛ばす。それと同時にその手から解放された。

「くっく・・・お前のその醜い心。最高だよ」

アフューカスはさらに口元をつり上げ、光流を見下ろす。

一方、光流は彼の真っ赤な瞳を憎しみのこもった瞳で睨みつけた。

「・・・お前、何者だ」

「そのうち分かるさ」

アフューカスは軽く流すように言う。

「美森とはどんな関係だ？」

するとアフューカスは軽く笑い声を洩らす。

「光流、彼女はお前を手に入れるためのコマ、だよ」

「!!!!!!？」

「もちろん、彼女には感謝している。彼女じゃなくちゃ、お前のそ

の心は育たなかった」

光流は意味を理解する事ができなかった。美森がコマ？心？いたいこいつは何の事を言っているんだ。

「光流、俺と一緒に来い」

「！？・・・は？行くわけねーだろ？」

どこに行くかは知らないが、光流はこの男とは何処にも行くはずがなかった。

「お前が帰るはずの場所はない・・・そうだろ？」

アフューカスは光流の目をじっと見つめる。

「お前は大切なものを傷つけ、失った。それでもこの世界に残るのか？」

「・・・」

光流は言葉を返すことができなかった。自分は失ってしまったのだ。当たり前前にそこにいるはずだった家族を。美森を。

・・・光を。

「残るか？」

アフューカスは光流に問いかけた。その声はどこか確信を持っているように聞こえた。

「・・・」

光流は唇を強くかみ締めた。今、「残る」と言えない自分がここにいる。

「もう決まっているようだな」

アフューカスはそう言うと、両腕を光流の肩に乗せる。

「光流。俺の目を見るんだ」

「・・・」

光流は黙ったままうつむいた。

「ここに残りたくないんだろ？」

光流はもうこの世界が嫌になった。もう自分を本当に必要としてくれる人は何処にもいない。それなら、今自分がここにいる意味があるのだろうか。

光流はゆつくりと顔を上げた。そして炎のような瞳と目があう。  
・・・時間が止まったように感じた。

光流は彼の瞳から、目をそらす事ができなくなっていた。そして次の瞬間、光流はその場に崩れるように倒れこんだ。  
アフューカスの勝ち誇ったような笑みが見えた・・・ような気がした。

「ライト」

突然の言葉に光流は目を覚ました。

「起きたか、ライト」

「・・・？」

光流は、わけが分からず寝かされていたベッドから体を起こした。ベッド以外に唯一、この部屋にあった前の椅子で、アフューカスが腰を下ろして光流のことを見据えている。

「ずいぶん落ち着いたみたいだな」

「・・・ライトって俺の事か？」

光流はアフューカスを睨みつけながらそう言った。

「ああ。そうだ。今からお前は“ライト”だ。地上にいた時の名はもう必要ない。今、ここは“魔界”だからな」

光流は自分の耳を疑った。魔界というものが本当にあるなんて信じられない。窓の外を見ると、一面が闇に染まっており、その中に小さい月が浮かんでいるのが見えた。その青白い光は、ここが今までいた世界とまったく別のところである事を証明しているようだ。

「どうだ？いい場所だろう？魔界は」

「・・・」

「まあそのうちお前も、この闇が心地よく感じるさ」

「・・・なんで俺をここに連れてきた？」

「俺がお前を“一人目”として選んだんだよ。“魔界の住人”としてのな」



「・・・」

「お前の持っていた、憎しみと怒りの心の闇が俺を引き付けた。・・俺が手をかけてそれを引き出してやったがな」

その時、光流の心に再び怒りがわきおこってきた。

「・・・」。俺を手に入れるために美森に近づいたのか!？」

「・・・」

その時、アフューカスがゆっくりと立ち上がった。光流は恐怖を感じたが、その場から動かず、じっとアフューカスを見据えた。

その瞬間、上から頭を力強くつかまれた。

「その感情はいいが・・・ここにまで来て地上へ未練があるか。それならいつそすべて忘れるか?その方が楽だろう」

その言葉に光流は凍りつく。この男は、光流からすべてを奪うことができるんだ。

今まで歩んできた軌跡を。

家族を。

・・・ - 美森を。

「やめて・・・くれ」

光流の口からは弱々しい言葉しか出てこなかった。

アフューカスは鼻で軽く笑うと、人差し指で顎を押し上げた。

されるがままにアフューカスの顔を見上げると、彼は得意そうに微笑んだ。

「いいか?お前はここに来た時から“魔界の住人”だ。地上の事は忘れる。そして“光流”ではなく、“ライト”だ。分かったな?」

アフューカスは光流に向かって、言い聞かせるように言った。

光流は、彼の炎のような瞳からの圧力に勝てるはずもなかった。

この男には逆らえない、そう感じた。

「・・・はい・・・」

光流は弱々しくそう答えるしかなかった。

アフューカスは満足そうな笑みを浮かべると、光流から視線を外した。そして、背を向けて部屋の隅にあるドアに向かって歩き出し

た。

「・・・一つだけお願いがあります」

アフューカスは動きを止め、肩越しにこちらを見る。

「もう一度だけ美森に会わせてください」

光流はできるだけ力強く、そう言った。

アフューカスはしばらくの沈黙の後、静かに口を開いた。

「いいだろう。ただし条件がある・・・俺の代わりに魔界の住人を100人集めろ」

「・・・！」

「俺がやつてもいいんだが、何しろ俺はここの王だしな。いろいろと忙しいんだよ」

「・・・」

「そうすれば、美森とに会わせてやるよ」

そう言つと、アフューカスは奇妙な笑みを浮かべて光流の前から姿を消した。

それから十年以上の時がたつ。

しかし、ライトは何も変わっていない。背の高さも。髪の毛の長さも。魔界に来てから、ライトの時は止まったままだ。

・・・地上にいる美森はどうしているだろうか。きっと綺麗な大人の女性になっているに違いない。

そして、もしかしたら、自分のことはもう忘れてしまったかもしれない。

「ライト」

突然アフューカスに声をかけられ、ライトはハッと我に返った。

「あと一人だそうだな」

「あ・・ああ」

「気を抜くなよ」

すると、アフューカスはライトの隣から腰を上げた。そして再びライトに視線を送ると、力強く言った。

「いいか。決してあの事は他の住人には言うなよ。面倒くさい事になるからな」

「分かってます」

ライトは静かにそう答えた。

そしてアフューカスは満足そうな笑みを浮かべ、部屋から出て行った。

ライトは、アフューカスの足音が聞こえなくなるのを確認すると、ベッドに横になった。

（そう。あの事は決して他の住人には言うてはいけない。自分自身のためにも。他の住人のためにも。言ってしまうえば、きっと自分のように辛い思いをするだけだ）

ライトは時々思う。自分も他の住人のように、記憶が無ければどんなにいいかと。そうすれば地上に戻りたい気持ちも起こらない。光を再び求めることもない。そうなればライトも、他の住人の様に完全に闇に染まることができるだろう。

・でも、美森に会えなくなるのは嫌だった。もう一度いいから会って、あの時のことを謝りたかった。そして再び笑顔が見たかった。

他の住人は、ライトが地上から連れてきた人物だ。その住人たちが、再び地上に戻りたいと思わないのもライトのお陰だ。

ライトは記憶を奪ってきた。人の歩んできた軌跡を消してきた。その方が都合が良かったからだ。ライトにとっても、この魔界にとっても。

ライトのような人物が魔界に溢れてしまつたら、魔界は大混乱に陥るだろう。それにライトのような思いをするのは、自分一人です分だ。

だから、記憶を奪つた事は決して言うてはならない。

#### 4 本当の笑顔

葵はいつものように目を覚ました。

今日は月曜日。またこれから同じような一週間が始まるのだ。

葵は憂鬱な気分になりながら、ベッドから体を起こした。そして、朝食をとるため、一階へ降りていった。

「おはよう。葵ちゃん」

玄関を出ると、そこには爽やかな笑みを浮かべて立っている世紀の姿があつた。

「おはよ・・・ございます」

葵は世紀がいたことに驚いたが、一応それに返事をする。

「私、ここの近くに住んでるの。だから、今日、一緒に行ってもいいかな」

「あつ・・・はい」

すると世紀は口元で手を握り、くすりと笑う。

「・・・敬語じゃなくて、タメ語でいいのに」

「・・・うん」

葵は、ためらいがちにそう答えた。そして二人は、駅に向かって歩き出した。

「良かった・・・少し落ち着いたみたいだね」

いつものように満員電車からやっとの思いで抜け出すと、世紀が静かに話しかけてきた。

「・・・え？何が？」

「だって、この前あった時はものすごく怖い顔してたから。でも今は、少し優しい感じがする」

「・・・」

葵は、自分ではほとんど自覚がなかった。気づかない感情までもが、顔に出てしまっているらしい。葵はライトの言った事を思い出した。

（私って顔に出やすいタイプなんだ）

「ね。葵ちゃん。こっちの道から行こう？こっちのほうが少し早く着くの」

駅から少し歩くと、世紀は立ち止り、路地裏を指差す。

「うん。いいよ」

その道は、日光が当たらないせいか、他の場所よりうす暗い。しかし葵は気にすることなく、世紀の後に続き歩き出した。

「あと少しだよ」

少し歩くと、世紀はそう言う。

「・・・うん」

と、その時、誰かに肩をトントンと叩かれた。驚いて振り返ると、そこには中学生くらいの女の子が立っていた。いや、正確に言うとなだの女の子ではなかった。ショートカットの髪からは、猫のよう

な耳が飛び出していて、目もまた猫のような鋭く尖った瞳をしている。

「こんばんはあー!!」

その少女は、その瞳をゆがまして葵に笑いかけた。

葵は一步、後づさる。彼女は明らかに“ここ”の人間ではない。

「えゝ！なに？ジェニミの事怖いの？葵おねーちゃん!？」

その少女 ジェニミは葵に顔をぐいっと近づけると、不機嫌な顔をしてそう言った。

「っ……」

「んじゃ、ジェニミもお姉ちゃんの事怖いゝ。耳とんがってるうゝ」  
ジェニミは葵から一步後退ると、わざとらしくそう言う。

(・・ウザッ)

葵は少しだけ恐怖を覚えたが、今はこの少女ージェニミをつるさく感じる気持ちのほうで、明らかに大きくなっていた。

まだジェニミはわざとらしい表情で、葵の事を見ている。

「どうしたの!? 葵ちゃん!」

葵がいけないことに気付いた世紀が、慌てた様子で戻ってきた。

世紀は葵の顔を見て落ち着いた表情を見せると、葵のすぐ隣にいたジェニミを凝視した。その顔には、驚きと焦りが入り混じっている。

「へえゝ。お姉ちゃん以外にも見える人がいるなんて珍しいねえ」

ジェニミは表情をくるっと変えると、目を丸くして世紀の方を見た。

「葵ちゃんは下がって」

世紀はそう言うと、葵を隠すようにして前に立った。その手にはあの十字架の形をしたキーホルダーのような物が握りしめられている。

「そんなに警戒しなくていいのにゝゝ！ジェニミ何も悪いことしないよ?」

「……」

世紀はジェニミの言葉を聞き流すと、手に持っていたキーホルダーを、自分の前に突き出すようにして持つ。

そしてそれが光に包まれたかと思うと、弓のような形に変化した。「あなたのような“完全な魔界の住人”には消えてもらう必要があるります。そうすれば、あなたを闇から解放することができるでしょう」

世紀は驚くほど落ち着いた口調で言った。

「何いつてるの？ジェニミ意味分かんない」

「……」

そして世紀は手に持っていた弓を引いた。

するとジェニミが思い出したかのように、手のひらをこぶしでポンツと叩いた。

「あー！もしかしてあなた“カリウド”？ライトが、地上にはそんな人達がいるから気をつけるって言ってたよー！」

葵は“ライト”という言葉に少しドキリとした。どうやらジェニミはライトの知り合いらしい。

「……すぐ闇から開放してあげるから」

世紀は力強い声でそう言うと、掴んでいた矢を放した。そしてそれとほぼ同時に、ジェニミは隣にあった塀にピョンツと飛び乗った。その瞬間、ジェニミがさっきまで立っていた後ろの塀に、矢が勢い良く突き刺さる。

「危ないなあ。カリウドのお姉ちゃん。葵お姉ちゃんはそんな事しないのにー！」

ジェニミは塀の上から世紀を見下ろすと、イーッと歯を見せた。

葵はそんなジェニミの顔を見て浅くため息をついた。

（早くしないと学校遅れちゃうじゃん）

「世紀さん」

葵は世紀に控え目に声をかけた。しかし世紀は、ジェニミを睨み付けているだけで、葵の言葉に気づく様子がない。

（……はー……）



とその時、誰かの手が葵の口を押さえつけた。

「!!!!」

そして、世紀達には見えない、塀で隠れた場所に引きずり込まれた。

「ごめんね。びつくりさせちゃった?」

葵の背後から聞こえてくる楽しんでいるような声は、ライトのものであった。

ライトだと分かって安心したが、口を押さえられているので声を出すことができない。葵は無理やりその手を口から引き剥がした。

そしてライトと向き合つと、できるだけ落ち着いた口調で言った。  
「何しに来たの?」

「・・・この前、また迎えに来るって言ったよね?」

「・・・」

「ジェニミが邪魔しちゃって悪かったね。子供っぽいところがあるからさ」

ライトはそう言うつと、いつものように微笑んだ。

「・・・ライトは私を魔界に連れて行こうとしている・・・」

葵はライトの目を力強く見据えてそう言った。ライトの笑顔が少しだけ引きつったように見えた。

「そして私を、その住人にしようとしている・・・でしょ?」

「・・・うん。そうだよ」

ライトは軽くため息をつきながら、微笑んで言った。

「・・・何で・・・私を連れていく必要があるの?」

「葵がこの世界にくだらなさを感じている、理由はそれだけだよ。その耳も僕が何かをやったわけじゃない・・・葵の気持ちがそうさせたんだ」

「・・・」

「それとも魔界に行きたくない理由でもあるの?」

「・・・それは・・・」

葵は言葉に詰まってしまった。自分が“ここ”にいる理由を見つ

ける事ができなかった。

すると、ライトが葵の行き詰った顔を見てニコツと微笑んだ。

「それなら・・・」

「あれえ？ライト来てたの？」

突然、後ろの堀からジェニミが顔を出した。

「ジェニミ」

ライトは困ったようにジェニミに笑いかける。

「なんだあゝ！来てたなら声かけてくれれば良かったのに！」

そう言つと、ジェニミはライトに駆け寄りライトの腕にしがみついた。

「・・・ジェニミは何の用でここに来たの？」

「んゝ。ジェニミは葵って人がどんな人なのか見に来た！ライトがあつちで、ギインとその人について話してるの聞こえたから！！」

「・・・」

「・・・案外フツーの人だね！ものすごく可愛い人だったらどーしよーかと思っちゃた！」

そう言つとジェニミは、葵の方を見てニヤーと笑つた。

（ウザインですけど・・・）

そして葵は、踵を変えて歩き出した。すると、世紀が地面に横たわっているのが目に入る。

「世紀さん！？」

葵はそう言つと、世紀に駆け寄つて体を抱きかかえた。よく見ると、彼女の膝から血が流れ出ていた。

「大丈夫？」

葵は世紀の怪我が思っていた以上に軽かったので、少し安心して声をかけた。

「うん。大丈夫。斬られたときに驚いて倒れただけだから」

世紀は微笑みながらそう言つと、ゆっくりと立ち上がった。しかし、すぐまたその場にしゃがみ込んでしまった。

「・・・あれ？」

世紀は自分でも、何かなんだか分からない様子だ。

「残念でしたあゝ。ジェニミの爪には毒があるんです〜！」

驚いて振り返ると、そこにはジェニミとライトの姿があった。

ジェニミは、自分の猫のように尖った爪を見せ付けてニヤニヤ笑っている。

その隣でライトは、困ったように二人に笑いかけた。

「しばらくは動けないと思うよ〜！」

「……」

世紀はジェニミの顔をじっと睨み付けると、俯いた。

「どうしたの？カリウドさん。そんなんじゃ、僕達を消す事はできないよ」

ライトは馬鹿にしたような笑みを浮かべると、世紀の方に歩み寄った。

世紀は必死に体を動かそうとしているが、ジェニミの毒が回っているせいで動けないようだ。

するとライトは、しゃがみ込んでいる世紀に向かって手をかざした。そしてその手を上に持ち上げた。それと同時に世紀の体も空中に浮いた。まるで見えない何かに持ち上げられているようだ。

「……」

「……僕達にとって君らは、邪魔者以外の何者でもないんだよね」

ライトはそう言うと、世紀に向かって微笑みかけた。

「そう！そう！邪魔あゝ！何かうるさいし〜！」

その隣でジェニミが腕を組んでのしる。

ライトは軽く息をつくともう一方の手を世紀に伸ばした。

その時、葵に寒気がはしった。このままではヤバイ、そう直感的に感じた。そして気づくと、ライトの腕を掴み、押さえつけていた。

「……」

ライトは、驚きの入り混じった表情で葵を見る。それと同時に世紀の体が地面に落ちた。

葵は、押さえつけていた手をすばやく引つ込めた。そして呟くように言った。

「・・・やりすぎだ思う・・・」

「ちよつと〜！邪魔しないでよ〜。葵お姉ちゃん！」

葵はその言葉を見無視して、ライトの表情をこっそりと窺った。

ライトは笑っていた。

だが、その目は笑っていない。作り物のようなとても冷たい目だ。葵はその瞳をみてぞっとした。こんなライトを見るのは初めてのような気がする。

「・・・葵にとってこの人は、大切な人なの？」

ライトはいつものように、その顔に親しみやすい笑みを浮かべる。  
「・・・」

葵は、世紀が少し戸惑っているのが感じられた。しかし、すぐに答える事ができなかった。葵にとって世紀は大切だ。しかし、それを口にするほどの自身が葵にはなかった。たとえ口にしたとしても、その言葉がものすごく軽く、意味のない物になってしまふような気がした。

するとライトは静かに口を開く。

「・・・葵にとってこの人はただの他人。それなのに、なんでこんなに必死になれるの？」

そしてしばらくの沈黙のあと、葵は呟くように答えた。

「たしかに、私と世紀さんは他人かもしれない。・・・でも“友達”だよ・・・」

そう言い切ると、葵は自分の言葉に恥ずかしさを覚えて顔を伏せた。自分がこんなことを言うなんて信じられない。  
ライトから返ってくるのは嫌なほどの沈黙だけだ。

そして、葵は再び顔を上げると、ライトの目をしっかりと見据えて言った。

「それと・・・私、魔界には行かないから」  
「・・・」

「たしかに今の私にはここに残る理由が無いかもしれないけど、それはこれから見つけていけばいいと思う・・・し」

「・・・そっか」

ライトは呟くように言うと、かすかに微笑んだ。

しかしその笑顔は、さっきのとはまるで違った、どこか悲しげな、そして寂しげな笑顔だった。そして葵に背を向けると、スタスタと歩き出す。

「ちよつと！？ライト〜！」

その後をジェニミが小走りでついて行く。そして二人は溶けるようにして姿を消した。

葵はしばらく二人の消えた場所を見つめていた。ライトの最後に見せた笑顔が、頭から離れない。その笑顔が本当のライトを隠しているように見えて仕方がなかった。

「葵ちゃん」

振り向くと、そこには静かに立っている世紀の姿があった。どうやら、体の毒はもう抜けたらしい。

「ありがとう」

「・・・うん」

すると何かに気づいたかのように、世紀が目を見開いた。

「葵ちゃんっその耳・・・」

葵は反射的に、すばやく手を耳に押し当てる。そして、驚きのあまり息を呑んだ。そこには普通の耳があった。形も元のように丸くなり、大きさも元のように戻っている。

「・・・」

「良かった。きっと葵ちゃんの心の闇が消えつつあるんだね」

世紀はうれしそうに葵に笑いかけた。

「・・・うん」

葵も、笑みを返しながら言った。しかし、葵はライトのことが気になって仕方がなかった。・・・あの笑顔の奥には、いったいなにがあるのだろう。

「葵ちゃん！学校遅刻しちゃうよ」

気がつくと、世紀が少し先で葵のことを手招きしている。

「うん」

葵は小走りで世紀の所へ向かった。

「んだよ！！ライト！！」

ギインは怒ったようにそう言うと、サッカーボールを乱暴にライ  
トに蹴り飛ばした。

「なんでギインが怒ってるんだよ」

ライトはそう言いながら、片足でボールを受け止めた。

「・・・葵をあきらめたって本気で言ってるのか！？最後の一人だっ  
たのに！！」

「・・・サッカーしに公園まで来たのに、何でそんな話してるの？」  
そう言うと、ライトは強めにボールをギインに蹴り返した。する  
とそのボールは、ギインの横を通り過ぎて後ろの茂みに入ってしまった。  
った。

「あゝ！！どこ蹴ってたんだよ！！」

ギインはそう言いながらも、ボールを追って茂みに入っていく。  
ライトはそんなギインの後姿を見送ると、浅くため息をついた。  
たしかに葵を手放すのは少し気が引けた。しかし今の葵は、もうラ  
イトの求めている葵ではなくなってしまった。ここに連れてくる事  
ができる人間は、心に深い闇を持った人間だ。しかし、あのカリウ  
ドをかばった葵を見る限り、もう葵はここに連れて来る事ができな  
い。

葵は光を見つけてしまった。光流には見つけれなかった物を見つけてしまったのだ。

「こらっ！だめでしょ。ライト！！」

突然、茂みの中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

そして、その中からサッカーボールがポンツと飛び出し、それは丁度ライトの足元で動きを止めた。

「アルシス、いたんだ」

ライトが声をかけると、その茂みの中から一人の女性が姿を現した。

年齢はライトと同じくらいで、キラキラと光る銀色の髪を横でひとつに束ねている。そして彼女の手には、スケッチブックらしき物が握られていた。

「あんなボール蹴っちゃギインには取れないでしょ！まだ小さいんだから！」

「俺は小さくねえ！！」

アルシスの後ろから姿を現したギインが、怒鳴るように言った。そしてギインはアルシスを追い抜き、ライトの隣まで来ると、体をライトにぶつけながら言う。

「俺、小さくねーよな！？ライト！」

「・・・小さいと思うけど」

「ほらっ！ライトだってそう言ってるじゃん」

アルシスは口元に手を当てると、クスクスと笑い出した。

「うるせー！！」

ギインはほのかに顔を赤らめながらそう叫ぶ。

「で、アルシスはある所で何してたの？」

ギインの言葉を軽く聞き流すと、ライトはアルシスに問いかけた。  
「んっ。ちよつとね。植物をスケッチしてたんだ。ほら、ここにある植物といたら公園にある人工的なものしかないでしょ？」

「・・・そっか」

「図鑑に載ってるような、いろいろな花や植物スケッチしてみたい

「んだけどな」

そう言つと、アルシスは困つたような笑みを浮かべた。

ライトはその笑顔を見てどキリとした。なぜか、アルシスの笑みが美森の笑みと重なって見えたのだ。

「・・・っ」

ライトは突然2人に背を向けて、早足で歩き出した。

「えっ！？ライト？」

「ライト！サッカーもうやんねーのか！？」

しかし、ライトは二人の言葉にも歩みを止めずに歩き続ける。今はただ、美森に会いたくてたまらなかつた。

「いつもライトはあーなんだよ」

ギインはライトの姿が見えなくなると、ため息混じりに言った。

「何考えてんだか俺には全然わかんねー」

「・・・そうなんだ」

アルシスは呟くようにそれに答えた。

「まあ、ギインはまだおこちゃまだから分らないのかもね？」

そう言つとアルシスは、からかう様な笑みを浮かべた。

「何だと！この白髪頭！！」

「言つたな！けっここの色気に入ってるのに！」

「ずいぶんと楽しそうだな」

「！！」

突然、低い男の声が二人の背後から聞こえた。

驚いて振り返ると、そこには腕を組んで悠然と立っているアフユカスの姿があつた。



葵はテレビの前に座っていた。しかし、テレビを見ているわけではない。ただそこにあるテーブルに座って、バリバリとせんべいを食べているだけだ。

テレビでは漫才がやっているらしく、隣に座っている清音が、それを見てゲラゲラと笑っている。

葵はせんべいを全部口に入れると、二階の自室へ行くために立ち上がった。

「あれ？あおちゃん、もう寝るの？」

清音はテレビから視線を外すと、葵を見上げて言った。

「うん。おやすみ。お姉ちゃん」

葵はそれにそっけなく答えると、茶の間を後にした。

後ろで清音が、「おやすみ」と返しているのが聞こえた。

葵は自室に入ると、ベッドにうつ伏せに倒れこんだ。

まだ眠くは無かった。ただ暇だった。テレビを見てもつまらない。だからといって勉強する気にもなれなかった。

しばらくベッドの上でゴロゴロすると、葵は何となく外の景色が見たくなって窓を開けた。

そこにはたくさんの星が瞬いていた。葵は久しぶりに、こんなにたくさん星を見たような気がした。

「はー・・・」

葵は外の空気を吸い込むと、ゆっくりとはき出した。

（綺麗・・・だなぁ・・・）

そしてその闇は、葵の汚れた部分をそっと隠してくれているように感じた。

そしてライトの事をふと思い出した。しばらく会っていないような気がする。

（・・・今ごろ、何してんだろ？）

もしかしたら、いつも笑っているライトでも今この瞬間は笑っていないのかもしれない。でも、ライトが最後に見せたような悲しい顔で笑っているよりは笑っていないほうがいい、葵はそう思った。

笑顔を無理に作るのはきっと辛いだろうから。

（多分ね）

葵は再び夜空を見上げると、窓を閉めるため手を伸ばした。

「よっ！！葵、久しぶり！！」

突然、聞き覚えのある声が葵の頭上から降ってきた。

驚いて顔を窓から出し、見上げてみると、そこには懐かしいギインの姿があった。今日は普通の子供の大きさだ。

そしてギインの隣には見覚えのない、女性の姿があった。年齢は、葵と同じくらいか少し上くらいだ。

そして彼女の髪は、夜の闇を背景にして明るく銀色に輝いており、とても奇麗だ。

「こんにちは。葵ちゃん！」

その女性はそう言うと、葵に笑いかけた。

「あっ・・・こんにちは」

葵は、聞こえるか分らない位控え目に、返事をする。

「私の名前は、アルシスっていうんだ」

「・・・」

葵は何が何だか分からず、アルシスをじっと見つめた。いったいこの二人は何をしにここに来たのだろう。そして葵は、ここにライトがない事が気になって仕方がなかった。ギインがいるのにライトがないとは何だか変な感じがした。

「あ・・・」

葵は思い切って口を開いた。

そして次の瞬間、驚きのあまり目を見開いた。そこには誰もいな

かった。ただ何もない夜空が広がっているだけだ。

まるで瞬きをした瞬間に二人が消えてしまったように感じた。

（確かにさっきまでここにいたのに・・・もしかして目の錯覚・・・？）

葵はもう一度いない事を確認すると、窓をゆっくりと閉めた。

「まだ葵には俺たちの事が見えてる！！」

ギインは屋根の上に腰を下ろすと、隣に座っているアルシスに弾んだ声で言った。

「だね！話を聞いたら、もう見えなくなっていてもおかしくない思っただけだ」

「さっそくアフューカスさんの所へ報告しに行くかー！」

ギインは立ち上がると、首をコキコキと鳴らしながら言った。

「あつ。ちよつと待って！」

そう言つとアルシスは、スケッチブックを取り出した。

「ちよつとここでいろいろな物スケッチしていききたいなーって思ってたんだけど」

「えー！ここまで来てまた絵描くのかよ！めんどくせーなあ」

「・・・お子様だからこの楽しみが分からないのかもねー」

アルシスは、そう言いながらニヤツと笑った。そしてフワツと浮き上がると、ギインを見下ろして言った。

「できるだけ早く終われるように努力するから！！」

アルシスはそいい残すと、夜の闇に消えていった。

葵は窓から差し込んでくる光で目が覚めた。  
もう太陽は高い位置にあるらしい。

（寝すぎちゃった）

しかし今日は日曜日だ。だから問題はない。

葵はベッドから体を起こす。そして昨夜の事が脳裏に浮かんた。ただの夢だったのかもしれない。葵はそう思った。

そしてのろのろと一階へ降りると、顔を洗い、何か食べ物がなか冷蔵庫を開けた。

そしてその時、誰かに肩をとんと叩かれた。

葵は反射的に振り返り、そしてそこに待ち受けていた人差し指が見事に葵の頬にめり込んだ。

「・・・お姉ちゃん・・・なにやってんの？」

そこには、からかうように笑っている清音の姿があった。

「引つかかったあゝ」

清音はうれしそうにそう言うと、そこに「おはよ。あおちゃん」と付け加えた。

「おはよう」

葵はそっけなくそれに答えると、冷蔵庫からヨーグルトを取り出して、台所の椅子に腰を下ろした。続いて清音もその隣に腰を下ろす。

「ね？あおちゃん。歌に興味ない？」

清音が突然葵に問いかけた。

「・・・は・・・」

「今日、私が入ってるサークルの卒業した先輩達が演奏会を開くのね。もし良かったら、一緒に行かない？ちょー綺麗で感動するんだから！」

「・・・」

葵は歌が嫌いというわけではなかった。むしろ音楽を聞いたり、詩を読むことが好きなほうだ。

「うん。いいよ」

清音はその言葉を聞くと、うれしそうに微笑んだ。

その会場は葵が思っていたより、大きくはなかった。というかそこは、時々映画を見に行く市民会館だ。

その入り口付近には『×合唱演奏会』という看板が立てかけてある。

（合唱か・・・）

葵はその看板を見送ると、清音の後に続き会場に入った。

葵は始まった合唱に静かに耳を傾ける。歌声が会場全体に響き渡り、まるで人が歌っているようには思えなかった。

しばらくすると、一人の女性がステージに残って会場に向かって頭を下げた。

どうやらこれから独奏に入るらしい。

すると、その女性が歌いだした。葵はその歌声に耳をすます。

一つの歌声が会場を包み込んだ。その声はしっかりとっていて、どこにも迷いが無いような、そんな声だった。

葵はそんな彼女が、とてもすごい人だと感じた。彼女はとても楽しそうに、微笑みながら歌っている。

しかし葵は、彼女の笑顔を見てドキリとした。

とても悲しそうだ。

そしてその笑顔が、ライトのあの笑顔と重なった。

（この人も無理して笑ってる・・・？）

「綺麗でしょ？あおちゃん」

隣に座っていた清音が、ささやくように言った。

「・・・うん」

葵は彼女から目を離さずに、それだけ答えた。

「私、今日歌った先輩たちに挨拶しに行くんだけど、あおちゃんも来る？」

会場を出ると、清音が葵に問いかけた。

葵は一瞬迷ったが、何となく行ってみたくなった。あの笑顔で歌った人に会ってみたくなつたのだ。

「・・・うん」

葵は控えめにそう言った。

清音はその言葉を聞くと、驚いたように葵を見た。どうやら、来るとは予想していなかったらしい。

しかしすぐに笑顔に戻って、「んじゃ、いこーか！」と言うと、葵の腕を引っ張って歩き出した。

「日菜野先輩！！」  
ヒナノ

清音は元気にそう言うと、一人の女性の所へ駆け寄って行った。

「清音ちゃん。久しぶりだね」

その女性は手を振って清音を迎えた。そして二人は楽しそうに話し出した。

葵は二人の様子を、少し離れた所から見ていた。清音と楽しそう

におしゃべりをしている女性は、あの独奏をした人に間違いなかった。

とても楽しそうに笑っている。

そしてふと葵と目が合った。すると清音と言葉を交わし、葵を手招きした。

葵は少し戸惑いながらも、二人の所へ歩いていった。

「この子が私の妹で、葵っていうんですよ」

清音はニコニコしながら、葵の肩に手を乗せると言った。

「葵ちゃんっていうんだ。清音ちゃんと似て可愛いね」

彼女は二人の顔を見比べながら楽しそうに言う。

葵は顔が熱くなるのを感じた。「可愛い」と言われたのは、ライトの時を含めて二回目だ。

「あつ。あおちゃん、照れてる〜！」

清音はからかうように言うつと、指で葵の頬をつついた。

「葵ちゃん、私、日菜野美森っていうんだ。私の歌、聴いてくれてありがとね」

「・・・いえ・・・」

そして葵は美森にチラツと視線を向けた。目が合うと、美森は優しく微笑みかけてくれた。

やっぱりその笑顔はライトの笑顔と重なった。どこか美森はライトに似ている、そう感じずにはいられなかった。

「ライトって人知ってますか？」

「え？」

葵はその時、しまったと思った。つつい思っていた事を口にしてしまった。

「なっ・・・何でもないです・・・」

「・・・そう？」

美森がライトに似ているからといって、知っているはずがない。

ただ歌っているときに見せた、悲しそうな笑顔だけはライトのあの笑顔とそっくりだった。

「あ！じゃあ、先輩、そろそろ失礼します」

「うん。気をつけて帰ってね。清音ちゃん、葵ちゃん」

美森が手を振ると、清音は軽くお辞儀をして美森に背を向けて歩き出した。

葵も清音の後に続き、歩き出す。

振り返るとそこには、笑顔で手を振って見送っている美森の姿があった。

葵は美森に頭を下げると、再び前を向いて歩き出した。

ライトは灰色の空間にいた。壁も机も椅子もすべてが灰色だ。そしてどこかライトの部屋に似ているような気もした。

「わざわざあなたの部屋に呼び出すなんて、俺に何かようですか？」  
ライトは目の前に足を組んで座っているアフューカスに静かに言った。

「もう分かっているはずだが？・・・ライト？」

アフューカスはライトをしつかりと見据えて重たい口調で言った。

「まあ座れ」

「・・・・・・」

ライトは何も言わずに、その場にあった椅子に腰を下ろした。

「最後の一人はどうした？・・・そろそろこちらに連れてきてもいいはずだが？」

「・・・もう今の人間は諦めました。・・・別の人間を探します」

ライトはアフューカスと目を合わせないようにして、できるだけ落ち着いた口調で言った。



「・・・」

「それなので、もう少し時間はかかると思います・・・」

そしてしばらくの沈黙の後、アフューカスが静かに口を開いた。

「それは駄目だな。今の人間でいけ」

「！」

「俺をいつまでも待たせるな」

「・・・」

「まだその人間の心の闇は完全に消えたわけではない。今のうちにさっさとこちらに連れてこい」

ライトは黙って俯いた。何も言い返せない自分に腹が立った。

「お前も美森という奴に早く会いたいんだろ？」

「・・・」

そしてアフューカスが立ち上がった気配がした。そしてライトの前まで来ると歩みを止めた。

すると突然、下から顎を強く掴まれた。そして無理やり上を向かされた。

次の瞬間、炎のような瞳と目が合った。

「いいか？早くその人間を連れて来い。今までのように記憶を消しちまえば簡単はずだ・・・分かったか？」

「・・・はい」

ライトはそうとしか答えることができなかった。

・・・どうしてもこの瞳には逆らうことができないのだ。

葵はふと窓に目を向けた。

そこには夜の闇に混じって、星々が小さな光を出して輝いていた。

目の前にある机には教科書とノートが広げであるが、握っているシャーペンは止まったままだ。

葵は昼間聞いた、美森の演奏を思い出した。あの綺麗で、そしてどこか寂しげな歌声が頭から離れない。

そしてふと、窓から視線を外した。窓ガラスに人影が見えたような気がしたからだ。

振り返るとそこにはライトがいた。ただ静かに葵の事を見下ろしている。

「・・・ライト？」

「・・・良かった。まだ僕の事見えるんだね」

そう言つと、ライトはいつものように微笑んだ。まるでそれが当たり前のように。

「・・・何で笑ってるの？・・・そんなに幸せなの？・・・私はライトのようにいつも笑っていられない。別に幸せな事や楽しい事があるってわけじゃないのに笑う必要なんてないでしょ？」

葵は唇を噛み締めた。もしかしたら今の言葉はライトを傷つけてしまったかもしれない。

「ごめんね。でも僕は笑う事を止められないんだ。どうしてだろうね」

そう静かに言つと、腰をかがめ、葵の目をじっと見つめてきた。

そして次の瞬間、その瞳と目が合った。とても綺麗なブルーグレイの瞳。

葵は目が離せなくなっていた。ずっと見続けていたい、そう感じた。

そして、意識が遠のいていくような感覚に襲われた。どんどんまぶたが重くなる。

このまま目を閉じてしまおう、葵はそう思った。

その時、ライトの目が苦しそうに歪んだ。

葵は驚いて目を見開いた。もうそこにライトの瞳はなかった。ライトはすでに立ち上がっており、葵に背を向けて立っている。

「・・・どうしたの？ライト」

葵はライトの背中に向かって控えめに呼びかけた。

「ごめん・・・。葵」

「・・・え？」

そしてライトの姿がみるみる薄くなり始めた。魔界へ帰ろうとしているのだ。

「待って」

葵は自分でも驚く位の力強い声でライトを呼び止めていた。ライトの体は元に戻り、驚いたように肩越しに振り返った。

「・・・美森さんっていう人を知ってる？」

葵は美森の笑顔を思い浮かべながら言った。やはりその顔は、ライトの笑顔と重なる。

次の瞬間、ライトは驚きの表情をみせた。しかしそれはすぐに悲しみに歪む。

「・・・僕の・・・な・・・」

「え？」

葵はライトが何を言ったのか聞き取ることができなかった。ただその声が弱々しく震えている事だけは感じ取ることができた。

そしてライトは音もなくその場から消えた。

アルシスは魔界の公園のベンチでスケッチブックを広げた。そこには色とりどりの草花、そして人物などが描かれている。

そしてそれを隣に座っていたギインが覗き込む。

「へー。こんなに描いたんだな。アルシス」

ギインはスケッチブックをペラペラとめくりながら関心したような声を上げた。

「うん。まあね。もうちょつと描きたかったんだけど、ギインが早くしろー！ってうるさかったからさ。これだけしか描けなかったよ」

「っていうか、これだけ描けば十分だろ！？」

「いや、十分じゃないねいー！」

アルシスはニヤニヤと笑いながら楽しそうに言った。

「私はもつと描くつもりだから！」

「・・・あつそ」

そしてふとアルシスは顔を上げた。公園の入り口付近にライトが歩いているのが目に入った。

「ライトー！」

アルシスはそう叫ぶと、「ギイン、行こ」と呟いてライトの方へ駆け寄った。その後にギインも続く。

「こんな所でどうしたの？」

「別に・・・」

ライトは弱々しく呟いた。

「んだよー！ライト、テンション低いぞ！？」

「・・・いつもどおりだよ」

「・・・」

「・・・」

するとアルシスが2人の沈黙を破るかのように口を開いた。

「あー！そうだ。私、地上でいろいろな物スケッチして来たんだ。

ライトも見えて！」

そしてライトの前にスケッチブックを持ってくると、一枚一枚めくる様にして見せた。

それを無表情で見つめていたライトが一枚の絵で目を止めた。

「・・・何か気になる絵でもあった？」

それは女性の絵だった。アルシスがたまたま見に行った合唱の演奏会で独奏をしていた女性を描いたものだ。

「っー・・・」

ライトは厳しい表情をすると、二人に背を向けて走り出した。

「ライト!？」

そしてライトの姿が見えなくなると、ギンが静かに口を開いた。  
「な?いつもこうなんだよ」

「・・・」

アルシスはライトの消えた先を、じっと見つめることしかできなかった。

ライトは走るのを止めると、じっとその場に立ち尽くした。

まだ息があらう。そして唇を噛みしめた。

スケッチブックに描かれていた女性―彼女は間違いなく美森だった。  
た。

あの悲しそうに笑っている顔はあの時のままだった。

（何でそんなに悲しい顔をしているのだろう。何でそれなのに笑っているのだろう）

美森はきつと自分と同じだ。胸の中が寂しい気持ちでいっぱい、それなのに笑っている。

「笑顔」は本当の自分を隠すだけの仮面にすぎないのだ。

（行かないと・・・）

美森に自分が見えないことは分かっていた。“再会”することはできないが、きっと美森を感じることぐらいならできる。

あの時の自分の後悔が消えるわけではない。けれど、何かが変わると信じたかった。

葵が美森を見つけたのは学校帰りのことだ。いつも前を通る公園で、彼女はベンチに腰を下していた。

葵が公園に入って来ても、美森はそれに気が付く様子もなく空を見上げている。

「美森さん？」

気が付くと葵は美森に声をかけていた。

「葵ちゃん？」

美森は驚いたように葵を見た。

「こんな所で何してるんですか？」

美森はしばらくの沈黙の後、微笑みながら口を開いた。

「・・・ちよつとね。思い出してたんだ。お兄ちゃんの事。昔、一緒に住んでた所に来たら何だか懐かしくなちゃて」

葵は美森の以外な発言に内心で驚く。

「・・・もう今は一緒に住んでないんですか？」

「・・・うん。両親が別居してからはお兄ちゃんと私はそれぞれの両親と一緒に暮らし始めて、それ以来会ってない。・・・もしかしたらここに来れば会えるかもって思ったけどやっぱり無理だったみたい。もうたくさん時間たっちゃったしね」

「・・・」

「喧嘩したこと、謝りたくて、でも会うのが怖くて、そしたらあつという間にこんなに時間がたっちゃった。ほんとはすぐに会いに行きたかったのに」

美森はそう言うと、葵に笑いかけた。

とても悲しそうに。

とても寂しそうに。

葵は胸がズキリと痛んだ。

彼女は笑っている。悲しいのに笑ってるんだ。

（何で笑っているんですか？あなたは幸せなんですか？）

葵はハツとした。さっき抱いた疑問はライトにした質問と同じだ。  
（もしかしてライトは・・・）

その時、美森の前に何の前触れもなくライトが姿を現した。

「！！！」

ライトは葵の方を見ると、かすかに微笑んで目の前に座っている美森を優しく見下ろした。

そして、いとおしむかの様に言った。

「・・・ごめんね。あの時、ひどいこと言って。それに・・・会いに行けなくてごめん」

「・・・」

やはり美森はライトが見えていないらしく、ただ前をじっと見つめているだけだ。

たしかに彼女の瞳は兄のことを思っているはずなのに、目の前にいる兄を見ることができない。

するとライトは、美森をギュッと抱きしめた。

「本当に本当に大きくなったね。美森。体も心も。そして頑張ったね。寂しかっただろ？それなのによく頑張ったよ」

そしてライトは再び美森を力強く抱きしめた。

「一度あきらめた合唱にまた挑戦することができんだから、きっとこれから頑張れる・・・挫折してもそこから立ち上がる勇気が美森にはあるから」

そしてライトは抱きしめていた腕を放すと、美森に微笑みかけた。  
「・・・俺はずっと見守ってるよ」

葵はそんなライトの笑顔を見て、心から安心する。そして葵の瞳から一滴の涙が零れ落ちた。

（ライトの本当の笑顔だ）

その笑顔は優しくて温かい、そしてぬくもりのある笑顔だった。すると突然、ライトの姿が薄くなり始めた。

（・・・あれ？）

涙のせいだと思い、拭ってみてもライトの体はどんどん薄くなっていく。

すると葵の様子に気づいたライトが、静かに口を開いた。

「……もう葵ともお別れみたいだ」

「……？」

「その涙。その涙が証拠だよ。心の闇が消えたんだね。だからもう僕たちを見ることはできない……。でも他人のために涙を流すことができるのはとても素晴らしいことだから、その気持ち、忘れないで」

ライトがそう言い終わると同時に、その姿は完全に見えなくなっ

た。  
「……」

葵はただ、ライトがさっきまでいた場所をじつと見つめることしかできなかった。

確かにそこにライトがいたはずなのに、今はもう見えない。葵の瞳から零れ落ちる涙は、葵自身にも止めることはできなかった。

「葵ちゃん、どうしたの？」

美森が葵の様子を見て、心配そうに声をかけた。

「……っ……」

葵は震える声で、しかし美森の瞳をしっかりととらえて言った。

「……とても優しいお兄さんなんです」

それを聞いた美森は驚いたように目を見開くと、優しく微笑んだ。  
「うん。私、お兄ちゃんのこと今でも大好きよ。今回は会えなかったけど、きつといつか会える、そんな気がするんだ」

そして美森は空を見上げた。そして呟くように言った。

「まぶしいけど、とても綺麗な青空。お兄ちゃんの笑顔みたい」  
「……」

そして葵も美森と同じ空を見上げた。

（空ってこんなに綺麗だったっけ？）

そこには今まで葵が気づかなかった、たくさんのヒカリが溢れて



いた。

「俺に何の用だ？・・・アルシス」

アフユ・カスは、灰色の部屋の灰色の椅子に腰を下ろすと、目の前に立ちすくんでいる女性―アルシスに重みのある声で言った。

アルシスは唇をかみ締めると、声を絞り出した。

「もうこれ以上、ライトを苦しませないで下さい・・・」

アフユ・カスはその言葉を聞くと、嘲笑うかのような笑みを浮かべた。

「何。それならもう心配ない。ライトには違う人間を探すように言っておいた・・・今回の人間はライトでもてこずったみたいだしな」

「・・・」

「俺もさすがに待ちくたびれた・・・人間を代えたほうが結果的に早く終わるだろうよ」

そして口元に奇妙な笑みを浮かべると言った。

「見つけるのは簡単はずだ・・・人間は必ず心に闇を持っている。そうだろ？・・・アルシス」

「えっ？！魔界の人が見えなくなったの？」

朝の登校中、隣を歩いていた世紀が驚くような声をあげた。

「・・・うん」

「ほんと？よかった！」

世紀は嬉しそうに微笑む。それを見て、葵も嬉しくなった。

「また見たいー！！とか言うんじゃないぞー！久保田！」

突然、背後から聞き覚えのある怒鳴り声が聞こえてきた。振り向くとそこには繁樹がいた。

「良かったじゃん！！」

そう言うのと、葵の背中をバシンと叩いた。

「痛いんですけど・・・」

繁樹は葵の言葉が聞こえなかったように、二人を抜かして歩いて行く。

「・・・」

隣で世紀が微笑んでいるのが視界に入った。

\*\*\*\*\*

授業中、葵は空を見上げた。

真っ暗な夜空を眺めるのもすきだが、たまには明るい空を眺めてもいいと思う。

きつと夜空には無いものを青空では見つけられる。

真っ白な雲。

地上を元気に照らす太陽。

でも私はそんな雲や太陽が眩しすぎて時々嫌になる。

何で私とは正反対にあんなに輝いているのだろう。

そんなに私を明るく照らさないでほしい。

だから私は夜空が恋しくなる。

夜の闇は、私の汚れた部分をそっと隠してくれるから。

私はちっぽけな存在だっていいんだよ。と言ってくれるから。でも、思うんだ。

いつまでも夜空を眺めてちゃいけない。

青空に輝いている太陽の光を浴びるのも必要なだって。

私にとってその光は眩しすぎるかもしれない。

けれど、心から笑えなかった人が心から笑えた、そんな小さな変化  
みたいに、私もまぶしすぎるこの世界に少しずつでもいいから慣れ  
ていければそれでいい。

そしてきつと見つけられるはずだ。いままで見つけようとしな  
かった、新しいヒカリを。

e n d .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8692o/>

---

ヒカリ

2011年1月18日18時25分発行